

オーセンティシティに関する連続研究会
記録集

第3回

「文化観光におけるオーセンティシティとインタープリテーション」

オーセンティシティに関する連続研究会 記録

第3回「文化観光におけるオーセンティシティとインタープリテーション」

開催日時：2023年11月17日 11:00～13:00

主催：日本イコモス EP 常置委員会 + 早稲田大学インバウンド・ビジネス戦略研究会

動画記録：<https://www.youtube.com/watch?v=jsxkOKmFI8A>

研究会企画：桑原佐知子(司会)、武藤美穂子、山田大樹、木村浩之

<プログラム>

1. 開会挨拶

桑原佐知子(日本イコモス EP 常置委員会 委員)

2. 連続研究会趣旨説明

山田大樹 (帝京大学文化財研究所 講師)

3. 開催趣旨

①「城の「場所」としてのオーセンティシティ」

武藤美穂子(日本イコモス EP 常置委員会 委員)

②「ICOMOS 文化遺産観光国際憲章 (2022年) と大洲城」

桑原佐知子

4. 講演①

「ポスト・トゥルース時代の観光ー嘘と欺瞞の文化遺産ー」

宗田好史 (関西国際大学国際コミュニケーション学部 観光学科 教授)

5. パネルディスカッション・質疑応答①

6. 講演②

「観光の視点からのオーセンティシティ」

池上重輔 (早稲田大学経営管理研究科 教授)

7. パネルディスカッション・質疑応答②

8. 閉会挨拶

池上重輔

1. 開会挨拶

(日本イコモス EP 常置委員会 委員 桑原佐知子)

皆さん、こんにちは。それでは、時間になりましたので、これより日本 ICOMOS EP 常置委員会「第3回オーセンティシティに関する連続研究会」、早稲田大学インバウンド・ビジネス戦略研究会の共催にて『文化観光におけるオーセンティシティとインタープリテーション』と題しまして、研究会を開催させていただきたいと思います。

私は本日進行させていただきます、日本 ICOMOS EP の桑原と申します。よろしくご願ひ致します。

本日のプログラムです。まず、日本 ICOMOS EP 常置委員会主査山田大樹より開会のご挨拶を申し上げました後に、今回の研究会の趣旨と話題提供をさせていただきます。その後、講演①として、関西国際大学国際コミュニケーション学部観光学科の宗田好史先生より、『ポスト・トゥルース時代の観光 一嘘と欺瞞の文化遺産一』と題して講演いただきます。宗田先生におかれましては、ご参加時間が限られるということですので、講演②に入る前に、宗田先生に対するご質問の時間を少し設けさせていただければと思っております。その後、12 時頃より、講演②として、早稲田大学経営管理研究科の池上重輔先生より『観光の視点からのオーセンティシティ』と題してご講演いただいた後、パネルディスカッションという流れで進めさせていただきたいと思っております。

それでは早速ですけれども、山田の方から開会の挨拶をさせていただきます。山田さん、よろしくご願ひ致します。

2. 開会挨拶

(山田大樹)

みなさま、こんにちは。日本 ICOMOS EP 常置委員会主査を務めている山田大樹とします。「オーセンティシティに関する連続研究会」の代表も務めております。本日の会議は、本研究会の第3回にあたります。

本連続研究会の目的は、文化遺産における「本物」とは何かを考えることです。オーセンティシティは、日本語では真正性、真実性と訳され、文化遺産が「本物」かどうかを見るための指標であり、特に近代西欧における建築遺産の保存修復にとって非常に重要な概念です。しかし、オーセンティシティという用語は、文化遺産の世界で使われるだけでなく、70年代からは観光分野や広告分野、さらにはデジタルの世界でも一般的に使われる用語となっています。しかし、それは文化遺産の保存修復における意味合いとは少し異なっているようです。

文化遺産は、政府や一部の専門家によって保護されるだけでなく、地域社会の市民によって守られ残されていくものです。文化遺産保護の文脈におけるオーセンティシティと、他分野の専門家や市民が考えるオーセンティシティにギャップが生まれているのであれば、すり合わせるか、またはお互いに異なる解釈を理解し合う必要があると思います。

そもそもの「本物」の定義が曖昧になってきている今、さまざまな学問分野の視点から、文化遺産における「オーセンティシティ」について学際的に議論する必要があると考え、現在サントリー文化財団の助成を得て研究会を開催しております。第1回、第2回の動画は既に限定公開しており、さらに本研究会を含め、後日報告書としてまとめる予定です。

本日は、よろしくお願いいたします。

3. 開催趣旨

(桑原佐知子)

2. 開催趣旨

○コロナ禍を経て新たに策定された「観光立国推進基本計画（第4次）」（令和5年3月21日閣議決定）における、戦略の柱の1つ、「インバウンド回復」では、「地方誘客効果の高いコンテンツの整備」として、**古民家等の歴史的資源を観光まちづくりの核としての再生・活用**やこれらの高付加価値化の面的展開、**城泊や寺泊を核とした周辺の歴史的資源の活用等**「歴史的資源を活用した観光まちづくりの推進」とそれに関連する意欲的な数値目標が設定されている。

○歴史的資源（文化遺産）の活用はその資源の保全にとって不可欠である一方、資源(property)や場(place)のオーセンティシティ（真正性、真実性）の、誤解を生まないような歴史的理解を促進する「保全」「活用」「解釈」についてはあまり議論がされていない。

○また、「観光の視点」のオーセンティシティと「文化遺産の視点」のオーセンティシティの違いや、文化観光にて歴史的資源を活用する際、その両者をどう扱うべきなのかについても十分な議論がされていない。

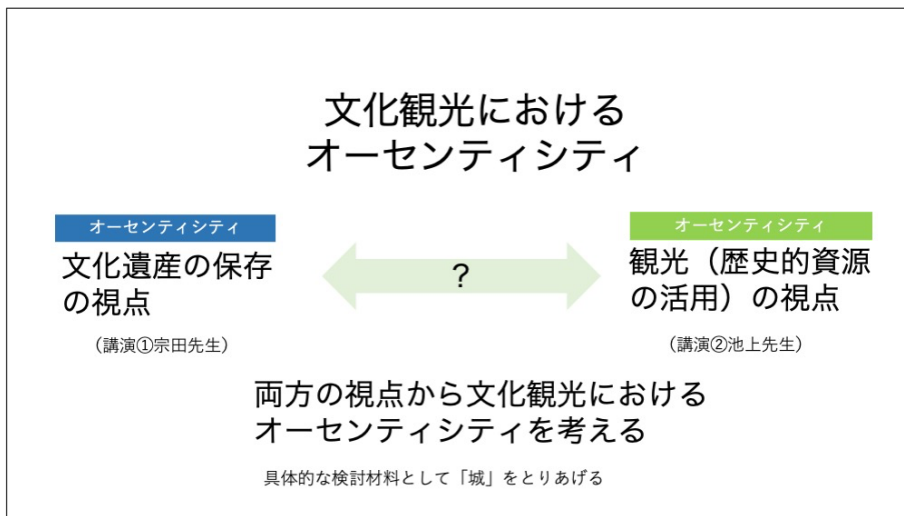
○本研究会では、**文化観光における歴史的資源の「保全」「活用」及び「解釈」を職業とする専門家が、その資源の誤解を生まない「歴史的理解」を促進しながら、観光客が求めるものに対応するために、何を知り何を必要があるのかについて考えます。**

本日の研究会の開催趣旨をご説明させていただきます。今年3月に閣議決定されました「観光立国推進基本計画」では、戦略の柱の1つであります、「インバウンド回復」に向けて「地方誘客効果の高いコンテンツの整備」として古民家等の歴史的資源を観光まちづくりの核として再生・活用していくことが謳われております。また、それに関する意欲的な数値目標が設定されているという状況です。

歴史的資源（文化遺産）の活用というのは、その資源の保全にとって不可欠である一方、資源や場のオーセンティシティ（真正性、真実性）の誤解を生まないような歴史的理解を促進する「保全」、「活用」、「解釈」の在り方については、あまり議論がされていない状況です。

また、観光の視点のオーセンティシティと文化遺産の視点のオーセンティシティの違いや、文化観光において歴史的資源を活用する際に、その両者をどう扱うべきなのかといった議論も十分になされていないという状況であると認識しております。

本研究会は、文化観光における歴史的資源の「保全」、「活用」、そして「解釈」を職業とする専門家が、その誤解を生まない「歴史的理解」を促進しながら、観光客が求めるものに対応するために、何を知り、何を必要があるのかということを考えることを目的として開催致します。



この後、本日のパネルディスカッションの内容とも関係する概念について、少しお話しさせていただきます。文化観光におけるオーセンティシティというのは何なのかということ、スライドの左側に記載のある文化遺産の保存の視点からのオーセンティシティ、そして、右側に記載されている観光の視点からのオーセンティシティが存在する中、両者の視点から、どのように文化観光のオーセンティシティを考えればいいのかということ、本日の主題としております。文化遺産の保存の視点からのオーセンティシティについては宗田先生、観光の視点からのオーセンティシティについては池上先生から、その理論や考え方をご講演いただき、具体的な事例として、城をテーマに少し議論ができればと考えているところです。

それでは、話題提供の1つとして、武藤さんの方からご紹介させていただきます。武藤さん、よろしくお願いいたします。

① 城の『場所』としてのオーセンティシティ

(武藤美穂子)

世界遺産条約履行のための作業指針におけるオーセンティシティ(真正性または真実性)

真正性を測るための8つの属性 (真正である状態かどうか、資産の真正性をよく示している要素)

世界遺産条約履行のための作業指針 第82段落

< Attributes >

	< 属性 >
• form and design;	「形状(形態)、意匠」
• materials and substance;	「材料、材質」
• use and function;	「用途、機能」
• traditions, techniques and management systems;	「伝統、技能、管理体制」
• location and setting;	「位置(立地)、環境」
• language, and other forms of intangible heritage;	「言語その他の無形遺産」
• spirit and feeling; and	「精神、感性」
• other internal and external factors.	「その他の内部要素、外部要素」

日本イコモス EP 常置委員会の武藤と申します。本日は、どうぞよろしくお願い致します。私の方は、お城という場所を例に、「場所」のオーセンティシティというものについて考えてみたいと思っております。

改めてご説明するまでもございませんが、「世界産条約履行のための作業指針」では、ある特定の資産が有するオーセンティシティあるいは真正性を図るための指標として、「形状・意匠」、「材料・材質」、「用途・機能」、「伝統・技能・管理体制」、「位置・環境」、「言語その他の無形遺産」、「精神・感性」、「その他の内部要素・外部要素」といった8つの属性が明記されております。

例: 姫路城(現存天守)の「真正性」と属性

1934年以来、一連の保存修復事業は、日本で発達した木造建築の保存修復技術を用い、「形状・意匠」、「材料・材質」、「伝統・技術」、「位置・セッティング」などの面で、確立した真正性の原則に準拠して実施されている。

新しく用いた材料の使用は厳格に管理され、すべての重要な提案は審議会で審議され承認される必要がある。価値があるとする17世紀を復元するため、19世紀、20世紀に増築された建物は撤去し、復元されている。ただし、地盤の弱さによる構造物の変形が、地震が多い地域では壊滅的な崩壊につながる事が避けられないという理由から基盤についてはRCを用いている。

ドアや窓など、以前の工事で発生した不適当な介入は、オリジナルの形状や実体に関する十分な情報が得られた場合に、適切な要素に置き換えられた。

「形状・意匠」・・・厳密に踏襲されている(17世紀とほぼ同じ)

「材料・材質」・・・厳密に踏襲されている(基礎は変更)

「用途、機能」・・・城郭としての機能は失われている

「伝統、技術、管理体制」・・・技術は継承、管理は姫路城管理事務所

「位置、セッティング」・・・位置は変化なし、周辺環境は変化

「言語その他の無形遺産」・・・「播州姫路酒井雅楽頭御行列」を模した大名行列

「精神、感性」・・・街の象徴、市民の愛着や誇りの対象として存続

「その他の内部要素、外部要素」・・・城下町の一部が残る



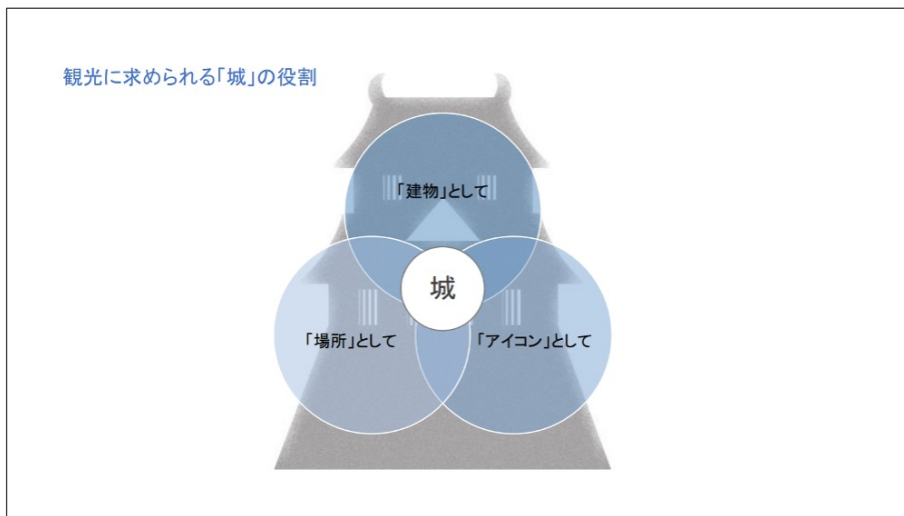
例えば、1993年に世界文化遺産に登録されました姫路城を例に考えてみますと、現在は

城郭としての機能は失われていることから、「用途・機能」の面で言えば真正性は失われてしまったと言えます。しかし、建造物の保存修復事業では、伝統的な木造建築の保存修復技術を用いることで「形状・意匠」、「材料・材質」、「伝統・技術」が厳密に踏襲されていると言えます。また、周辺の環境は時代と共に変化しても、天守や櫓、曲輪などから構成される城郭としての構えや旧城下町との関係性で言えば、「位置・セッティング」も大きく変化していないと言えるでしょう。さらに、姫路藩酒井家の参勤交代を模した、市民参加型の大名行列が開催されるなど、現在もまちの象徴として国内外から多くの観光客が訪れる場所となっております。

観光地としての「城」

		
<p>大洲城【復元天守】 大洲藩主加藤氏の居城。天守は江戸初期に建設され、明治21年に解体。現存する4棟の櫓（台所櫓、高欄櫓、宇綿櫓、三の丸南隅櫓）は国の重要有形文化財に指定。4層4階建の現在の天守は、明治期の古写真、天守雛形と呼ばれる江戸期の木組模型などをもとに、10年の歳月の後、平成16年に木造で復元。城跡は愛媛県指定史跡、大洲城天守雛形は大洲市指定有形文化財に指定。天守は「城泊」に活用され、城内では「大洲藩鉄砲隊」の演武が実演される。武家屋敷・商家が残る街並みと併せて、伝統行事「合わせ鶴飼い」が継承される。</p>	<p>平戸城【模範天守】 元禄17年に平戸藩主松浦氏によって着工、享保3年に完成。天守は建築されず、二の丸乾三重櫓を天守代用とした。明治4年、廃城令にて廃城。翌年狸櫓と北虎口門（獅子門）を残し、建物は解体。昭和37年に本丸沖見櫓跡に3重5階建、RC造の模範天守が建設され、見奏櫓・乾櫓・地藏坂櫓・懐柔櫓が復興された。天守閣風の建物は歴史資料館として、懐柔櫓は「城泊」に活用される。周辺には、松浦家私邸を利用した松浦史料博物館ほか、平戸ザビエル記念教会・オランダ商館等、異国情緒あふれる城下町を残す。</p>	<p>熱海城【新築】 名勝地錦ヶ浦を脚下に控えた天与の要塞地にある。戦国時代、小田原北条氏も水軍の根拠地として築城を希望しながら果たし得なかったと伝わる。天守閣風建物は桃山時代、慶長初期の様式にのっとり、5重9階建、RC造の高層建築として昭和34年に建設される。展望台・江戸体験コーナー・城郭資料館・武家資料館のほか、レストラン・トリックアート迷宮館を併設し、「城」文化をテーマにした複合型遊戯施設。映画ロケ地、桜の名所、花火大会の見学スポットとしても知られる。</p>

このように、観光地としてのお城を見てみますと、姫路城以外にも、現存する4棟の櫓が国の重要有形文化財に指定され、江戸期の木組模型などを基に天守閣が復元された大洲城や、平戸藩の居城がありました場所に模範天守を整備し、平戸ザビエル記念協会やオランダ商館などと合わせて、異国情緒溢れる城下町としての歴史を今に伝える平戸城などもございます。一方、実際には築城されなかったものの、小田原北条氏が水軍の根拠地として築城を希望したと伝わる場所に建設されました、お城をテーマとした複合型遊戯施設である熱海城なども人気の観光スポットとなっております。



このように、観光に期待されるお城の役割としては主に 3 つがあると考えられます。まず 1 つ目は、天守閣や櫓といった建物として、2 つ目は、武将たちにまつわるエピソードや歴史の舞台といった場所としての機能、そして 3 つ目は、これらを象徴あるいは具象化したアイコンとしての役割です。

「城」を中心とする「場所」の真正性

属性との関係性 ○踏襲している △一部に踏襲している ×踏襲していない
(≒天守を中心として、城郭・城下町としての状態を維持しているか)

文化観光における「場所」の真正性とは？

	authenticity			
	姫路城	大洲城	平戸城	熱海城
形状、意匠	○	△	×	×
材料、材質	○	△	×	×
用途、機能	×	×	×	×
伝統、技術、管理体制	○	○	—	×
位置、セッティング	○	△	×	×
言語その他の無形遺産	△	○	—	×
精神、感性	△	△	△	△
その他の内部要素、外部要素	△	△	△	△

authenticity

仮に、これら 4 つのお城を中心とする場所の真正性について、世界文化遺産の属性に基づいて整理してみますと、こちらのようになると考えられます。姫路城では多くの項目で○がつくのに対し、熱海城では多くの項目に×がつきます。このように、文化遺産を扱う専門家たちが重視する真正性というのは、多くの場合、「形状や意匠」、「材料」、「技術」、「原位置にあるかどうか」といったことに依拠するものであるのに対し、観光客が求める真正性とは必ずしもそうとは限らず、城下町らしさや伝統文化、それらが醸し出す雰囲気といった要素が大きな役割を占めるのではないのでしょうか。すなわち、専門家と観光客が求める、あ

る特定の場所に対する真正性には乖離があるのではないかといった課題が指摘されます。

『ざんねんな城郭事典』

源：HP「隠れしろう・城はあふしるし」 <https://zenon.jp/office/> の「お城の隠れ家ごんごんご」の付録に『日本城郭辞典』

天守閣は約150基
 明治維新前に落雷や火災で多くが消失
 明治廃城で50基が取り壊し
現存天守は12基
 +復元天守

広義にはお城は5万は存在した
 近世城郭は約400城建造
 明治維新まで存続したのは179城
 建築物が現存するのは51城

まちむら
スタジオ

	都市的価値	建築的価値
1 城址公園の敷地	☆☆☆☆	☆☆☆☆
2 史料館（資料館、博物館）の敷地	☆☆☆☆	☆☆☆☆
3 行政の中心である役所やその他公共施設の敷地	☆☆☆	×
4 学校の敷地	☆☆☆	×
5 駅構内の敷地	☆☆	×
6 神社や寺院の境内	☆☆☆	×
7 私的な建物や敷地	☆	×
8 住宅地や商業地や工業地	☆	×
9 荒地や畑地	☆☆	×



お城って天守閣だけじゃありません！

お城って建築だけじゃありません！

沼津城は跡形なく消滅している（静岡銀行等）

城郭の地理的・土木的・都市計画的な価値OUVは過小評価されていないか？

城郭を天守閣以外にも観光資源化できないか？

写真：Google Street View

さらに、一般にお城と言いますと、天守閣ばかりに目が行きがちでありますけれども、城郭とはその歴史的意味や都市基盤の形成において重要な役割を果たしてきたと考えられます。全国各地に存在した城郭ですが、明治の廃城例によってその多くが破却され、現在そのほとんどは忘れ去られた存在となっております。城址公園や資料館の敷地として残っているものは良い方で、沼津城跡地のように、オフィスビルが建ち並びその痕跡が全く消え失せてしまっているような場所もございます。

このように、城郭の立地はその地域にとって要となるような場所であることが多く、その立地のみで持ち得る地理的・都市計画的価値を再評価することもできるでしょうし、多くの城郭跡地がその歴史的価値を剥奪されてしまっているという現状があるということも認識しておく必要があるかと思えます。私からは以上です。

② ICOMOS 文化遺産観光国際憲章（2022年）と大洲城

（桑原佐知子）

ICOMOS文化遺産観光国際憲章（2022年） ※注：訳は正式なものではありません。

ICOMOS International Charter for Cultural Heritage Tourism (2022): Reinforcing cultural heritage protection and community resilience through responsible and sustainable tourism management
Adopted by the ICOMOS Annual General Assembly (Bangkok, Thailand) in November 2022

Tourism planning and cultural heritage management must be coordinated across all levels of governance in order to identify, assess and avoid the adverse impacts of tourism on heritage fabric, integrity and **authenticity**. (p.6)

Tourism development, infrastructure projects and management plans must contribute to preserving the integrity, **authenticity**, aesthetic, social and cultural dimensions of heritage places, including their settings, natural and cultural **landscapes**, host communities, biodiversity characteristics and the broader visual context. (p.6)

The **authenticity**, values and significance of places are often complex, contested and multifaceted, and every effort should be taken to be inclusive when considering the interpretation and presentation of information. (p.9)

Interpretation methods should not detract from the authenticity of the place. (p.9)

観光計画と文化遺産管理は、観光が遺産の構造、完全性、真正性に及ぼす悪影響を特定、評価、回避するために、あらゆる統治レベルにわたって調整されなければならない。

観光開発、インフラ整備事業、管理計画は、遺産が持つ完全性、真正性、美的側面、社会的側面、文化的側面の保全に寄与するものでなければならない。これには遺産の環境、自然景観、文化的景観、ホスト・コミュニティ、生物多様性の特性、より広範な視覚的景観も含まれる。

場所の真正性、価値、意義はしばしば複雑で、論争が多く、多面的であるため、情報の解釈と提示を考える際には、包括的であるようあらゆる努力が払われなければならない。

解釈の方法は、その場所の真正性を損なうものであってはならない。

文化遺産観光の中で、オーセンティシティというものが国際的にどのように捉えられているのかという紹介になります。2022年に改定された文化遺産観光国際憲章の中で、オーセンティシティという言葉が4箇所に出てきます。図の吹き出しの中に、その内容が記載されていますが、まず、観光計画と文化遺産管理においては、観光が遺産の構造、完全性、真正性に及ぼす悪影響を特定、評価、回避するために、あらゆる統治レベルにわたって調整されなければならないとしています。また、観光開発、インフラ整備事業、管理計画については、遺産が持つ完全性、真正性、美的・社会的・文化的側面の保全に寄与するものでなければならないとしています。この真正性というのは、しばしば複雑で論争が多く多面的であるので、情報の解釈と提示を考える際には、包括的であるようにあらゆる努力が払われなければならないとしています。

さらに、解釈の方法というのは、その場所の真正性を損なうものではあってはならないとされています。こちらの内容につきましては、後半のパネルディスカッションの方でのご参考にしていただければと考えております。

大洲市 歴史的資源を活用した観光まちづくり事業～経緯～

【大洲市の概要】

- ・愛媛県南西部に位置する人口約4万人の地方都市
- ・江戸時代は伊予大洲藩6万石の城下町が形成
- ・「大洲城」や明治期の豪商旧別荘である「臥龍山荘」等の歴史ある文化財あり

【大洲市が抱えていた地域課題と取り組み方針】

- | | | |
|----------|---|-----------------------------|
| 歴史的資源の保全 | ⇒ | 城下町の空き家をリノベーションし、事業者誘致 |
| 人口減少 | ⇒ | 観光を切り口とした産業創出による関係人口の創出 |
| 地域経済の縮小 | ⇒ | テナント誘致・民間投資を促進することで新規事業等の創出 |

観光を切り口に地域課題の解決につながる取組みを模索



出所：2023年9月22日観光庁セミナー 伊予銀プレゼン資料より

続きまして、具体的な事例として大洲城の話題提供させていただきます。先ほど武藤さんの8つのアトリビュートの説明でも出てきましたけれども、大洲市は、古民家などの歴史的建造物の保全やリノベーション、城を宿泊施設にするという城泊を展開し、歴史的資源の保全、人口減少、地域経済の縮小という地域課題の解決につながる取組みとして観光に取り組んでいます。

城下町エリアの建物の状況

※青色部は城下町の歴史的風致を感じ取れる建物を示す

■：2017年（H29）当時、取り壊しや新築・改築などが予定されていた物件



出所：2023年9月22日観光庁セミナー 伊予銀プレゼン資料より

図の中の赤い部分が、当時取り壊しや新築・改築が予定されていたところですが、地域の風致が損なわれることを危惧して歴史的資源を活用したまちづくり事業が開始しました。

事業開始までのプロセス

年	内容
2017 (H29)	4月 大洲銀行（伊予銀行の前身）の頭取を輩出した一族から不動産活用の相談を受ける 6月 大洲市・伊予銀行の勉強会発足 7月 大洲市観光まちづくり戦略会議発足 9月 大洲市・伊予銀行が福山城下町ホテルNIPPONIAへ訪問し、バリューマネジメント株式会社、株式会社NOTE・一般社団法人ノオトとの協議を開始
2018 (H30)	4月 バリューマネジメント社、ノオト社、NOTE社、大洲市、伊予銀行とで連携協定を締結 7月 一般社団法人キタ・マネジメント設立（7月 西日本豪雨災害発生） 10月 株式会社K I T A設立 いよぎんキャピタルが同社へ出資
2019 (H31・R1)	2月 市観光まちづくり戦略ビジョン（業案）策定 6月～地域住民説明会の開催 7月 せとうちDMO、内子町観光協会、キタ・マネジメント、内子町、大洲市でDMO連携協定を締結 7月 伊予銀行町家等改修事業 第1期つなぎ資金にて融資取引開始

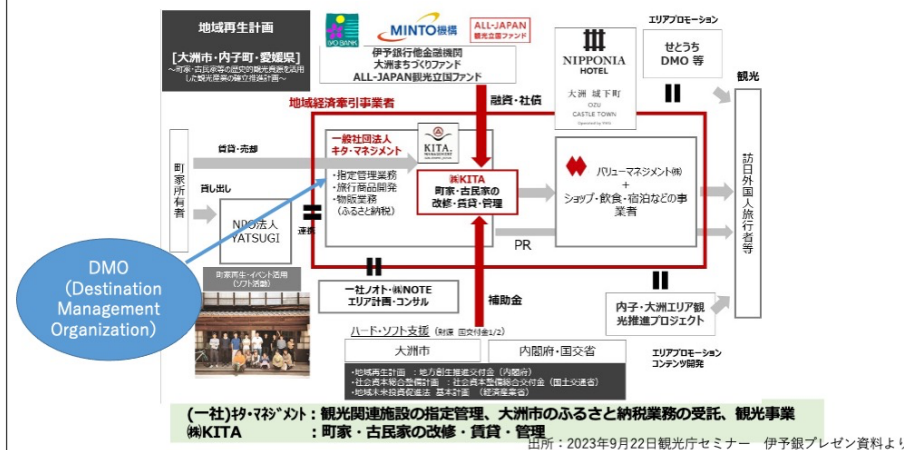
キタ・マネジメントは、大洲出身者が明治期に結成した貿易商社「喜多組」に由



出所：2023年9月22日観光庁セミナー 伊予銀プレゼン資料より

こちらは、事業開始までのプロセスを示したものです。まず、大洲市と伊予銀行の勉強会、大洲市観光まちづくり戦略会議が発足し、その後、大洲市、伊予銀行、歴史的建造物の保全・活用のノウハウを持っている NOTE 社やバリューマネジメント社などが連携協定を締結したりしながら、この事業を進めていきました。

大洲市 歴史的資源を活用した観光まちづくり事業 ～スキーム～



こちらは事業のスキームです。概略をご説明致しますと、DMO という観光地を経営する組織が中心となって市民活動などを含めた全体のマネジメントをする中、具体的な建造物の保全活用は（株）KITA という事業者がファンドからの融資や自治体からの補助金を受けながら、実際の運営をバリューマネジメントという企業に委託をする形で進めるとい、地域一体となって進めるスキームになっています。

大洲城の復元

1. 建築：

- 江戸時代の古絵図、明治時代に撮影された写真、木組模型等の存在により「木造による復元可能」と建築家宮上茂隆氏による報告
- 慶長年間（1596-1614）に建てられたといわれる天守を現代によりみがえらせるため、当時の技術を再現。富山県南砺市井波の宮大工と地元の大工たちの共同作業により木組みを完成。



先ほど、武藤さんの方からも少しアトリビュートの話がありましたが、大洲城というのは建造物としては復元されたものとはいえ、明治時代に撮影された写真や木組の模型等によって木造による復元が可能と判断されて、現代にその天守を蘇らせた取り組みとなります。

大洲城のキャッスルステイ

(1) 天守での宿泊

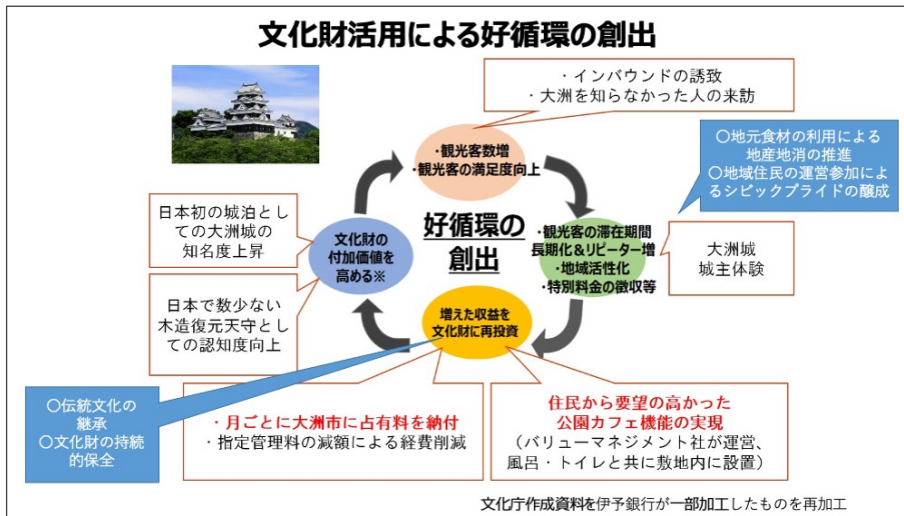
「代々の城主が感じた時間を体験することができる特別な時間」

- (2) 天守での豪華な料理を堪能
 - 当時の城主加藤貞泰が食したであろう献立に現代の技法を加えて表現
 - 器は加藤家が藩財政再建のために作らせた砥部焼の陶磁器を使用
- (3) 天守での1617年の城主入場シーン：
大勢の甲冑武者が城主を出迎え、鉄砲隊が祝砲を放つ
- (4) 臥龍山荘での伝統芸能の鑑賞（城周辺施設）
- (5) 市民による運営（歓迎旗振り、神楽の上演等）

○1日1組：55万円（一人）、1泊2日2名利用から（朝食・夕食各1回）
→1日110万円～ ※連泊不可
○年間30組限定（8月、12月～2月以外）
→最大3300万円（年間）の売上



大洲城のキャッスルステイは観光の城泊となります。城泊は、「代々の城主が感じた時間を体験することができる特別な時間」を提供するとしており、天守での宿泊の他、当時の城主が食したであろう献立を表現した食事、当時の城主の入場シーンの体験、当時の城主が鑑賞した伝統芸能の体験などを提供しています。伝統芸能は、市民による神楽の上演があるなど、市民による運営もなされています。



こうした事業によって、歴史的建造物が保全されたり雇用者数の面でも一定の成果を上げている事例です。少し駆け足となりますが、後ほどの議論の参考にしていただければと思います。

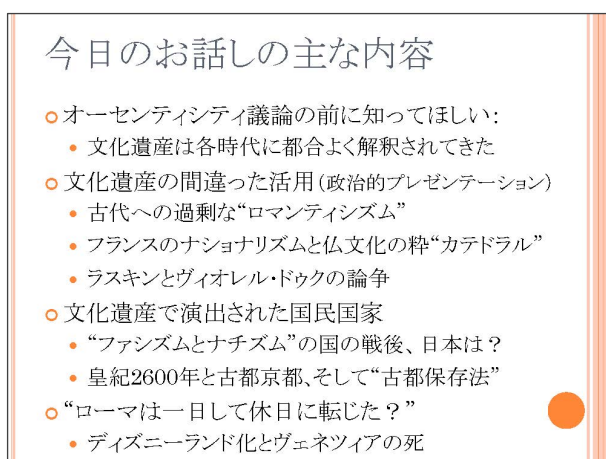
それでは、前置きが長くなりましたが、これより講演①宗田好史先生より「ポスト・トゥールース時代の観光一嘘と欺瞞の文化遺産一」と題したご講演をいただきます。宗田先生、よろしくお願い致します。

4. 講演①「ポスト・トゥルース時代の観光—嘘と欺瞞の文化遺産—」

(宗田好史)



宗田です。じゃあ、お話をさせていただきます。



今日、お話ししたい内容はオーセンティシティの議論の歴史的背景です。文化遺産のオーセンティシティは、観光も含めて、今までずいぶんと間違った活用がありました。30分ほどしか時間がないのでごく簡単に紹介させていただきます。

どのオーセンティシティ議論か？		
対象	論点	ワード
文化遺産のオーセンティシティ	真正性は、実際には決して絶対的なものではなく、常に相対的なもの/文化的多様性	保存/修復/復原/復元
都市のオーセンティシティ	都市の「文化」「景観」が「らしさ」が求められ、特に観光都市では市民/観光客が「ホンモノ」を問う	文化財基本構想/歴史まちづくり
観光行動のオーセンティシティ	文化遺産の正しい「歴史的理解」を求める？ 都合よく演出されてきた？	実証的/権威主義的/現象的
歴史のオーセンティシティ	「歴史は現在と過去のあいだの対話」(E.H.カー) 多様な歴史観が変遷し現代を反映	そもそも存在しない考え方？

皆さんご存知のように、文化遺産それから都市のオーセンティシティ、観光行動のオーセンティシティと並べ、最後、歴史のオーセンティシティを置きます。奈良ドキュメントの頃からずっと議論してはいますが、歴史にはオーセンティシティってないですよ。いろんな解釈があって、いろんな歴史観があります。歴史は無形ですが、有形の物だからオーセンティシティが議論できますね。では、観光行動で何がオーセンティックかって言われても、物と概念との中間にある行動、有形無形の境界で、どうオーセンティックを求めていくかは、大きな課題だと認識できます。

文化遺産の保存と20世紀の動き： 保存の理論的発展と社会情勢	
○マドリッド憲章(1904年)	◆ 日露戦争・パナマ運河
○アテネ憲章(1931年)	◆ 満州事変・世界恐慌・フーバーモラトリアム
○ヴェニス憲章(1964年)	◆ 東京オリンピック・ベトナム戦争
○世界遺産条約(1972年)	◆ 日本列島改造論・国連環境会議
○バラ憲章(1981年)	◆ ロッキード事件
○奈良宣言(1994年)	◆ 松本サリン事件

4

20世紀の歴史は文化遺産への視点をどのように変えたのか？

オーセンティシティの議論というのは 1994 年の奈良ドキュメントにまとめられましたが、その前からマドリッド憲章、アテネ憲章、そして初めてオーセンティシティが出てきたヴェニス憲章があります。20 世紀の間に散々議論されてきた保存理論の話なんです。

ヴェニス憲章(1964年)
記念建造物および遺跡の
保全と修復のための国際憲章

- 幾世代もの人々が残した歴史的に重要な記念建造物は、過去からのメッセージを豊かに含んでおり、長期にわたる伝統の生きた証拠として現在に伝えられている。今日、人々はますます人間的な諸価値は一つであると意識するようになり、古い記念建造物を人類共有の財産とみなすようになってきた。未来の世代のために、これらの記念建造物を守っていくという共同の責任も認識されるようになった。こうした記念建造物の真正な価値を完全に守りながら後世に伝えていくことが、われわれの義務となっている。

このヴェニス憲章は、世界遺産条約の10年近く前に成立し、ICOMOSが生れたんです。お若い方はご存知ないかもしれませんが、そもそも1972年の世界遺産条約に日本が1992年まで20年間批准できなかった理由の1つに、日本の姫路城ももちろんそうですが木造建築を解体修理するってことが、ヴェニス憲章を支持するヨーロッパの人たちからは散々批判されていたんですね。これは本当の保存じゃない。それはなぜかというのは、ヨーロッパ、特にイタリアとかフランスの文化財保存、特に建造の保存に関わる専門教育課程では、今日短くお話しするような議論を徹底的に2年も3年もかけて勉強させられるので、再建・復元はしてはいけないという強い思いがあるわけです。

オーセンティシティの考え方

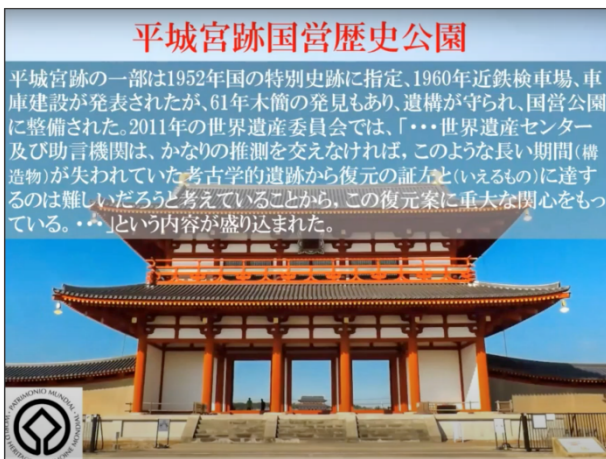
- 世界遺産条約では、文化遺産はその顕著で普遍的な価値を有していても、Authenticity(真正性)の審査を経なければ登録できない。
- Authenticityの尺度は:材料(Material)・意匠(Design)・技術(Craftmanship)・周辺環境(Setting)の4項目、(+精神的)
- 新たに、①形態と意匠、②材料と材質、③用途と機能、④伝統と技術と管理技術、⑤立地と周辺環境、⑥言語その他の無形文化遺産、⑦精神と感性、その他の要因

ヴェニス憲章がオーセンティシティをどう定義しているか、世界遺産条約の中ではそれがどう評価されるか。“test of authenticity”っていうのはどう効くかっていう点を整理しました。それが、日本が世界遺産条約を批准してすぐに世界の専門家を奈良に集めて、このオーセンティシティに関する会議をしました。奈良会議ではダイバーシティのことが注目されていますし、ダイバーシティの方が世界遺産の議論に影響を与えたってことになってい

ますが、それはそもそもオーセンティシティの議論の前提に、文化的ダイバーシティがあることを、日本の専門家が主張したからなんですね。



その奈良で、皆さんご存知の平城宮跡なのですが、この史跡整備の中で、様々な建物の復元が行われています。



これに関して、世界遺産条約の関係から、2011年にICOMOSからまず批判がありました。2011年の世界遺産委員会で言われているのが、この文面「相当な、かなりの推測を交えなければ、このような長い期間失われていた考古学的遺跡から復元の証左といえるものを得るのは難しいだろう、」これは簡単に言うと「でっち上げじゃないの」って言われたわけですね。この根拠とは何か。このでっち上げを奈良でやる、日本があれだけ批判された文化財の修復に解体修理はないよねって言ったんだけど、それはまだまだ厳密にやっているから許せるけど、この奈良のあの史跡に建てた展示施設、プレゼンテーションっていうのは、もうこれは捏造だよねと言われたわけです。

ヨーロッパの文化遺産保存の事始

- ルネッサンス期のローマ遺跡の再発見
- 遺跡の取扱いへの問題意識の成立
- 古代を復興した建築様式、過去への崇拜
- 埋蔵文化財の発掘・盗掘、海外流出
- ルネッサンス美術の流出への恐れ
- 1745年マリア・テレジア女帝による勅令、1818年の帝国議会の最初の立法
- 国民国家の国民意識の高揚から聖堂・城郭の崇拜、ドゥックとラスキンへ

何でそんな捏造を嫌うかって言うと、そもそもヨーロッパの文化遺産には長い長い保存の歴史があり、その陰に捏造の歴史があるわけです。



これはピラネージの版画に出てくるローマの遺跡です。こういう朽ちた建造物は、廃墟だからこそ雄弁に歴史を語る。だから、グランドツアーでローマに来たイギリス貴族は、この廃墟を見て歩きます。その遺跡”ruin”を、わざわざイギリスのランドスケープ庭園にします。イタリアの景色を真似て「まがい物の廃墟」をイギリスに建て、そこで紅茶を飲んだりしていたわけです。そういった楽しみ方があった。



一方、ルネサンス建築というのは、古代ローマ建築を復興しているわけです。ルネッサンス初期のアルベルティのマラテスティアーノ寺院はある意味ローマ建築の真似、まがい物ですけど、古代ローマ建築を調査し、ウィトルウィウス『建築論』に沿った復興です。



15年後のサンタ・マリア・ノヴェッラ教会のファサードもアルベルティによるものですが、古代ローマの建築論にゴシック建築の特徴を入れ、初期ルネッサンスの傑作と言われ、まがい物の域を脱しています。



それから、これは古大ギリシャ建築の影響を受けた古代ローマ建築の復興で、ルネッサンス建築の傑作パラッツォ・ルチェライでフィレンツェの都心にあります。このファサードでは、古代ギリシャのドーリア式、イオニア式、コリント式オーダー（様式）を一階から上に順に積んでいくルネサンス式のパラッツォ建築のデザインができ上がっています。



その百年度には、ミケランジェロによるローマのディオクレティアヌス帝のテルメ（浴場）遺跡を活用して、その上に建てられたサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ・エ・ディ・マリティリ教会です。比較的保存状態のいい古代浴場遺跡の主構造と平面形式を壊すことなく再利用し、殉教者を祈念する大規模な教会に再生しました。



すでに 15～16 世紀のルネッサンス時代から、古代ローマ建築の保存と活用が議論されました。古代遺跡の保存と活用ではあるけど、遺跡は雄弁に歴史を語っただけでなく、その復興でルネッサンスやバロック、その後の新古典派などの新しい建築様式が生まれました。その保存と活用、真似と創造をどこまでするのって議論があったわけです。

ヴィオレ・ル・デュクとラスキン

- 古代の建築を活用した時代
 - ルネッサンス建築は古代建築の復興
 - ローマ時代の大規模建造物を教会等に活用
 - 遺物の価値が理解され、保護の対象に！
 - 古代ローマの遺産を教皇の都市づくりに活用
 - その結果、イタリア都市の特徴が定まった
 - ローマ文明を継承、近代社会の象徴にした
- やがて歴史的建造物を活用する手法がナショナリズムの登場とともに欧州各国に広がった。

その新古典主義時代に登場したヴィオレ＝ル＝デュクとラスキンの論争です。古代ローマの建築を復興することがルネサンスだった訳だけど、その遺跡を旅したイギリス人は、遺跡をロマンティックに眺めていました。一方、フランス人のデュクはロマネスクやゴシックの大聖堂を次々と修復したことで有名です。古代ローマやイタリア式よりゴシック建築がフランス的なものとして高く評価しました。

EUGENE EMMANUEL VIOLLET-LE-DUC



19世紀フランスの修復建築家、古建築修復を創始。パリの裕福な家庭に生まれ、エコール・デ・ボザールを批判、入学せず、1836年イタリアを旅行、またフランス各地を回って中世フランス建築を学んだ。プロスペル・メリメ(1803-1870年、小説家・歴史家・上院議員)の助力で、建築修復に関わった。

未完成な部分、不完全な部分を取り除き、あるべき姿を追求し、より綺麗に直したのが、ヴィオレール＝デュクです、フランスのナショナリズムの勃興期に、いわゆるフレンチ・ゴシックとかフレンチ・ロマネスクが、古代ローマが滅びた後のヨーロッパを率いたフランク王国が偉大なフランスの原型にある。そのフランス文化がヨーロッパ文化の中心だと言い、修復に留まらず、本来のゴシック建築のあるべき姿、より完全な形を理論的に追及しました。市民革命の時代、荒廃したフランス各地の歴史的建造の復興は国家的な事業でした。

ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレール・デュク(仏)
EUGÈNE EMMANUEL VIOLLET-LE-DUC (1814-1879)

- 中世教会堂:ロマネスク、ゴシック様式の、ラ・マドレーヌ寺院、サント・シャペル(パリ)、ノートルダム(パリ)、アミアン、ルーアンの大聖堂、城館の修復
- 1863年からボザールの教授、修復の経験を元に『中世建築辞典』(1854-1868年)を出版。
- 設計も手がけ、ゴシック・リヴァイヴァルのサン・ドニ・ド・レストレ聖堂(1864-1867年)。
- ゴシック様式のアーチやバットレスの構造を合理主義的な立場から解釈、近代機能主義との連続性を説いた。

有名なノートルダムもちろんそうですが、サント・シャペルとかアミアンとかルーアンのカテドラルを、修復といって、現在の姿に造り変えていったわけです。その百年後には、ル・コルビュジエが『伽藍が白かった時』を著し、中世の職人が一つずつ手づくりで仕上げたカテドラルが白く輝いていた時こそが、偉大な時代だと高く評価してゴシック・リバイバル建築の文化的価値を現代にも有名にしたのです。



パリのサント・シャペル・パリです。問題はこの交差部に建っている尖塔です。これは、デュークが後から加えたものだとされています。



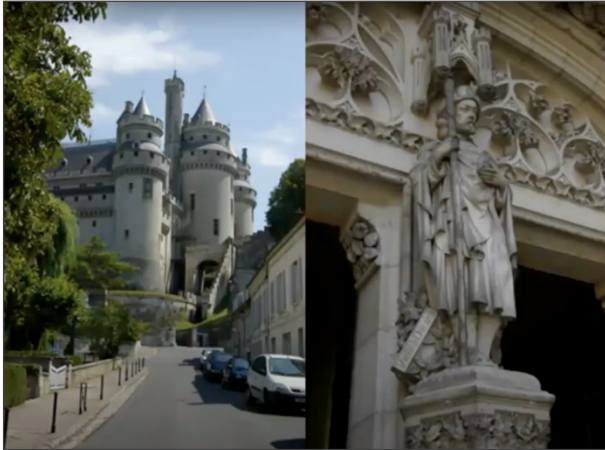
中のステンドグラスも綺麗ですが、19世紀中葉当時のカトリック教会は、歴史的建造物を復元するより、市民革命で傷ついた教会の権威と第一身分としての僧侶の権力を取り戻すために、偉大な記念碑が必要でした。聖堂を壮麗に飾り立て、キリスト教精神の復興に熱心でした。その壮麗さを強調するためにあったはずなのに、失われていたと思われた交差部の尖塔をより大きく復元することを望んだそうです。



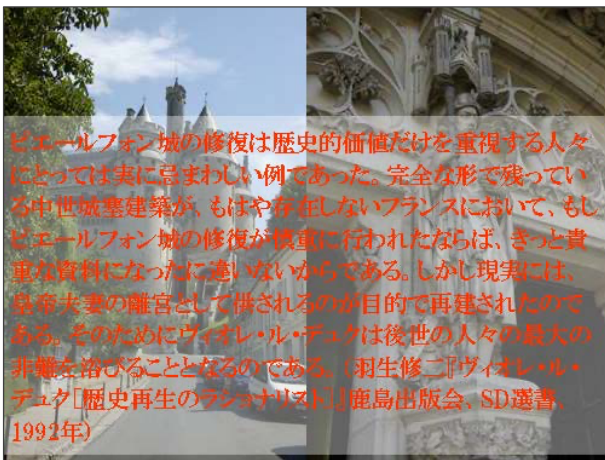
火事で燃えたノートルダムでも、写真中央部に聳える交差部の尖塔、これはもっと小さかったそうですが、デュク独特な理論でこうあるべきという姿に変更、付け加えられました。ゴシックの聖堂でも、その前のロマネスクのカテドラルの多くでは、左右対称に作られなかったものが多くあります。それぞれ何百年もかけて作っていますから、時代とともに材料や技術が変化して、最初のものから変わっていった、その不完全さを嫌いました。



だから、それを元の形に復元することが尊いと、より完全な見事なシンメトリー性を追求するってことがデュク。つまり、その建物が本来持っているべき神秘的な美しさをどう維持するかっていうようなことがデュクのやり方になります。



これはピエール・フォン城ですが、これも今の理論で言えば、廃墟と化していた中世の城跡の考古学的調査と遺跡として保存すべきです。科学的検証もせず、元の姿に復元していません。当時のナポレオン三世とその妃のための夏の王宮にしました。壮麗な別荘にしてしまったわけです。



これに嘯みついたのが、イギリス人のラスキンです。ピエール・フォン城の修復は、歴史的価値を重視する者にとっては実に忌まわしい例であったと言いました。完全な形で残っている中世城塞建築が、もはや存在しないフランスにおいて、重大な過ちを犯した。皇帝を満足させるために、貴重な歴史遺産を失い国民を欺いた。これはもう文化財の破壊だって言ったわけですね。

「本来あるべき姿に復元するから良いじゃん、嘘でも」みたいな、「昔より暮らしやすいから良いじゃん」みたいなことを言ったら、コテンパンに叩かれたわけです。

今、ラスキンを再評価する人々



文化遺産とは直接関係がないが、20世紀末の日本で、「文化経済学」の提唱として再評価されている。『建築の七灯』や『ヴェニスの上』の拡大解釈の読み方だと思われるが、金融経済が、金融工学と呼ばれる高度な数学的方法で発達した一方で、財以外の価値を評価し、その価値を文化価値とし、その最大化を図ることが発展であるという見方は理解できる。文化財の世界では過去の人！

ラスキンは、今いろんな分野で異なった紹介がされます。『建築の七灯』とか『ヴェニスの上』 とかに書いてあることが、文化経済学とか創造都市論をする人たちも引用しますので、ご存知の方も多いと思います。建築理論や美学、保存理論の歴史でもいろんな使われ方をします。



シャウハウゼン滝とテルの礼拝堂

彼はそもそも、自然遺産の方でも、アルプスの山々にトンネルを掘ったり、ケーブルカーを走らせたりとかするアルピニズムのあり方を批判しました。登山は、神聖な神々の世界であるアルプス、その雄大な自然を冒瀆する行為だと言ったわけですね。そのスイスは、このグランドツアーの一部である貴族のスポーツ登山によって観光大国になりました。その大衆化の過程で山岳観光施設を開発します。その後も、ナチズムの時代に対応したレクリエーション産業が発達した国です。一方、ラスキンの自然保護の主張はイギリス国内で発展しました。

ラスキンの修復論:『建築の七灯』から

- いわゆる「修復」とは、破壊の最悪の方法である。(略)それは、建築が被りうる最大の破壊である全体的破壊で、破片の一つさえも集めることができないほどに破壊する。破壊されたものについての偽った描写を伴った破壊である。
- この重大な問題で妥協しないようにしよう。完全に修復することは、不可能なことである。かつては偉大であったもの、あるいは美しかったものを修復しようとするのは、死者を立たせるのと同じように、不可能なことである。

ラスキンは建築に関して言っているのは、ロマン主義的主張です。修復すらも攻撃の対象にしている、破壊の最悪の方法である、直してしまったら、せっかく営んできた、歴史の積み重なりを徹底的に隠してしまう。こんなことをやっていいのかっていう話をしたわけです。より科学的な発掘、慎重な介入、復原禁止などを主張しています。イギリス人らしく、廃墟の美しさを礼賛します。イタリアの風景に模して、人工的な廃墟(ルーイン)を英国式ランドスケープ・ガーデンに置くのですから、修復を嫌うのです。

NIKOLAOS BALANOS(1860-1943)

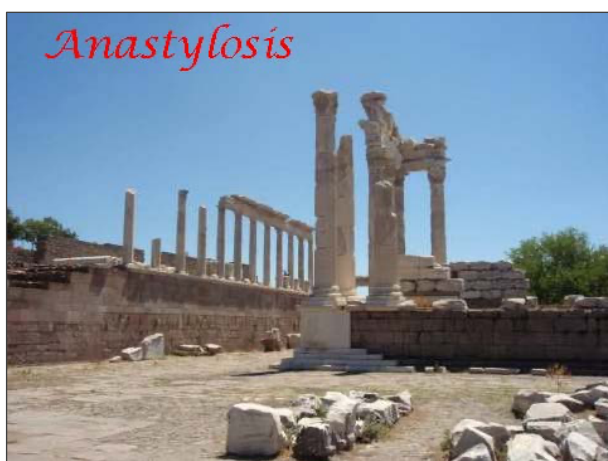
- ギリシャの修復家、フランスのパリ・ポンテック工科大で土木を学ぶ、デュクの影響を受けた。
- 1893年のギリシャ大地震による被災から、翌94年パルテノン神殿の修復を任された。
- 傷んだ大理石を入替え、古代の鉄のクランプをRCで置換等、その手法が批判された。
- 特に、北列柱廊のアナステイローシスは当初は評価されたが、その後再建方法が批判的
- 考古学知識を欠き、審美的復興優先が問題視

その頃、ギリシャで大地震があって、アクロポリスの丘のパルテノン神殿が被害を受けました。そこで、デュクの教えを受けた、ニコラオス・バラノスが、責任者として修復に当たりました。この時、アナステイローシスの議論が始まったわけですが、倒れたパルテノン神殿を建て直した。特に北列柱廊の復元というのは、当時はすごく見事に復元したので、震災前より綺麗になったって言われたんです。後になると「震災前より綺麗に作っちゃダメだろう」と言われて、それで古代のギリシャ時代にはもうすでに、鉄のクランプで大理石と大理石を繋ぐって技術があったので、その楔を打ち込んだんですけど、鉄は錆びるだろうっ

て言って、そこを当時非常に技術が発展していた鉄筋コンクリートを使ったそうです。実は、鉄筋コンクリートの方が鉄のクランプより弱かったのですが、修復と補強、その手法や材料についても批判されたりしたわけです。



ただ、このパルテノンに関しては、エルギン・マーブルと言われるペディメントのレリーフがブリティッシュ・ミュージアムに持っていかれるなど色々あって、文化財の帰属の問題とか国際協力の在り方などいろんな議論がありました。



その時、つまり、アナスティローシスに対する規範ができてから、変に復元しない、そこに倒れているものくらいまではいいけども、新しい材料を加えてはだめだ。バラノスは古い大理石を新しい大理石に変えた、それは日本の姫路城の修復でも、古くなった部材は、もちろん博物館にちゃんと残しておくのですが、新しいヒノキ、スギの建材で作りに替えていくことをするわけです。その後、二度の世界大戦とその戦災を経て、国際交流が盛んになっ

た戦後の1962年のヴェニス憲章には、この議論の影響が色濃く残っています。



その意味で、文化財建造物の保存や遺跡保存の規範として、今のパルテノンがあるわけです。同様にローマのフォロ・ロマーノの遺跡があります。フォロ・ロマーノには、文化遺産保存の長い歴史が刻まれています。



それは、さっき簡単に紹介したルネサンス期に活躍したアルベルティとか、ミケランジェロなどの有名な建築家たちが、ここにスケッチに行き、当時の遺跡（ローマ時代の廃墟）を古典として学び、そこからルネサンス建築を生み出したという、まさに過去の建造物の遺跡から現代（当時）の建築を設計・デザインしていく方法を学んでいる、建築史的にはすごく正しい文化財の使い方があったわけです。そこから革命的でクリエイティブなアートとしてルネサンス建築が生まれた反面、破壊も盛んでした。古代ローマの首都、その中心部だったフォーロ（広場）の廃墟には、膨大な量の古代ローマ時代の大理石が残っていたわけですね。当時は漆喰という材料がとても重要なので、漆喰をえるためには遠くから石灰石を運んでおかないといけないけど、フォロ・ロマーノに行くと大理石がいっぱいある。それ

を焚き火に燃やして、さらに水をかけると消石灰が取れる。その消石灰が漆喰の材料になるわけだから、建築の現場に行く人たちが馬車で来て、遺跡から彫像やレリーフ、柱頭とかを割って、それを馬車に積んで建築現場に持って行って、焚き火をして漆喰をとったりして相当荒れていました。それを17世紀の教皇たちが、色々保存の手を打ったってということがあり、文化財保存の最初のステップが始まるんです。その時の歴代の教皇たちのローマの大改造で、カンピドリーオの丘がミケランジェロの手によって、まず綺麗になる。それから、ポポロ広場やスペイン広場と階段、今のローマ市歴史的都心部の主要部分ができました。そこで止めておけば良かったのですが、イタリア王国の首都となった19世紀後半から20世紀初頭になり、ヴェネツィア広場を再編して偉大なモニュメントを作りました。



これが、(ローマの)ヴェネツィア広場です。

イタリア王国の首都ローマの建設

19世紀の「みやこ」の演出

- 「ヴィットリオ・エマヌエル統一記念碑」からエウルまでの「イアリア王国首都」建設、古代ローマの再現としての「ファシズム建築」への流れは、「嘘と欺瞞」の文化遺産活用で、国民を戦争に駆り立てた新興な誤りとして今も批判される
- 建築家ジュゼッペ・サッコーニ(1854-1905)設計のヴィットーリオ「統一記念碑」は1885から1935年に建設された「発明された歴史」
- ムッソリーニの「地中海帝国」とローマ帝国の再興
- 戦後まで大ローマ演出が続き「撤去論」も出たほど
- 建設に際して、周辺の歴史的だが無名の民家を撤去した破壊(sventramento)が批判的

19世紀中葉イタリアが統一されて、その記念碑を建て、イタリア再統一の記録と戦没者

を悼むため建築家ジュゼッペ・サッコーニが「ヴィットーリオ」（ヴィットーリオ・エマニュエレ 2 世の統一記念碑）という壮大な建築を作りました。古代ローマ帝国と中世コムーネ都市ローマ、そしてカソリックの中心に王国の新たな歴史を刻みました。もう発明です。



これです。

20世紀のナショナリズムと文化遺産

- ヴィオレ・ル・デュクとラスキンは、19世紀を代表する文化人として、文化遺産の保存を主張した。
- デュクの主張したフランス国民文化としての古建築の保存は、やがて20世紀前半には、ナショナリズムの台頭とともに、ファシズム、ナチズム、 Kommunismusの国威発揚に使われた。
- 20世紀前半は、しかし同時にモダニズム建築全盛の時代でもあった。ファシズム等が倒れ、英仏米の戦勝国と共に戦後のモダニズムの時代には、ナショナリズムを否定した建築保存理論が発展した。
- ル・コルビュジエ『伽藍が白かったとき』(1957年)にも民主的なセンスでその方向が示された(?)

これが、ここでいうナショナリズムの文化遺産の活用、まさに嘘と欺瞞のってやつになるんです。ラスキンが批判したヴィオレ・ル・デュクの改造がより本格的に起こり、ファシズム、ナチズム、 Kommunismusがプロパガンダに使った。20世紀の人類を襲った大災禍です。



ムッソリーニが再編したのが、このヴェネツィア広場です。こんな壮大なスケールアウトした大きな建造物を 19 世紀の終わりから 20 世紀初頭に建ったので、広場の名にもなったヴェネツィア宮殿を自分のオフィスにし、さらにフォロ・ロマーノ遺跡を活用しました。



ヴェネツィア宮殿っていうのはかつて、ローマがヴァチカン、ローマ教皇領の教会国家だった時代、旧ヴェネツィア共和国がその大使館として使っていた建物です。だから、ヴェネツィア広場、ヴェネツィア宮殿です。その奥、フォロ・ロマーノとの間にカンピドリーオの丘がありミケランジェロが法王の命で整備した広場、そこにローマ市庁舎と古文書館があります。今でもローマの都心部の中でも特別な場所です。しかし、あまり人気がないのは、ちょっと恥ずかしい、黒い時代の直視できないほど不幸な歴史が刻まれているからです。



ヴェネツィア宮殿のバルコニーに立って演説をするのが、ムッソリーニは大好きでした。このヴェネツィア広場っていうのというのは程よい大きさで、3万人くらい入るらしいんですが、この人たちに”Il Popolo Italiano, Figli dei grandi Romani (...)”(イタリアの人民、あの偉大なローマ人の息子たち)と呼びかけ、さあこれから再びあの地中海帝国を作りにいこうと演説したわけです。それを見たヒットラーが、俺もやってみようっていうことで、ニュルンベルクとか色々壮大なナチズム建築を真似たんです。



そもそもこのヴィットーリオ、真っ白な膨大な、20世紀に造った記念碑を作る時に、この下にあったフォロ・ロマーノ遺跡を壊しているんです。さらに、ビア・フォーリ・インペリアリというんですが、これを作らせたのはムッソリーニにで、この時もこの遺跡を壊しています。今、観光客がたくさん通る通りですけど、なぜ遺跡を壊して道を通したのか、それがヴェネツィア宮殿、このバルコニーに立って、ライトアップしたコロッセオが見え、右手でそれを差し示しながら、「あの偉大なローマ人の息子たちよ」と叫ぶ。3万人の目が一斉にライトアップされたコロッセオを見て「俺たちやれるぞ」と思わされたわけです。

遺跡の上に統一イタリア記念碑



過度な修復が歴史を捏造し、国民を戦争に駆り立てました。文化財保存にはこうした嘘と捏造の歴史がありました。だから、ヨーロッパの文化財保護教育では、文化財保護が歴史を捏造し、ファシズム、ナチズム、 Kommunismus時代に国民を欺き、戦争を煽ったと教えます。しかし、ご存知の通り、文化財保護教育の歴史が浅い日本ではほとんど教えません。もちろん、軍国主義時代の日本でも同様のことが起こりました。その舞台となった京都や奈良では大学で教えますが、東京の方ではあまり触れないようです。

EUR・ローマ万博1942年の会場都市



ムッソリーニには、さらにエウルというローマ市南の新市街地（ニュータウン）を1942年に開催予定だった万博（エキスポ'42）のために造りました。これがそのエウルの中心の広場です。これはポポロ広場の真似です。ローマ都心部のモニュメントを真似し、バロックの都市デザイン手法を踏襲します。エウルには、四角コロッセオと呼ばれる「労働宮殿」があります。資生堂の男性化粧品タクティクスのテレビ・コマーシャルで使われました。白い立方体の瓶でした。まだ、1970年の大阪万博、つくば市のデザインにも影響が見られます。



カラカラ浴場、インペリアーレ通、ティレニア海をシンボライズした広場や街路の都市デザインで有名。

こういう偉大な古代ローマ人たちの真似っというのをすることが、ファシズムのファッションでした。



同時に、重要な建物はモニュメンタルにというのがファシズム建築でした。だから、そのカテドラル（大聖堂）や城郭をよりモニメンタルに建てることに関して、建築や文化財の専門家はすごく神経質、ましてモニュメントを際立たせるために、その周辺の小さな建物をクリアランスすることはタブーです。でも、これは皆さんご存知のヴァチカン宮殿のあるサン・ピエトロ広場です。戦後もしばらくたった1950年代になって、ファシズム的な改造をしました。



このサン・ピエトロ広場は、広大で30万人が入るといわれています。



実はローマの街に20世紀、それも戦後まで、このサン・ピエトロ広場の前には普通の街があり、多くの住民が暮らす建造物、集合住宅が建っていたんです。



それを見事にクリアランスして、“Via della Conciliazione”って言いますが、この再開発工事で、このローマの歴史的市街地にこんな縦断する道路を作ったのが1957年です。私は1956年生まれですが、私が生まれた頃はまだこんなローマで、歴史的都心部の町並みの破壊が平然と行われていました。決してそんな古いことではないわけです。ちなみに、日本の町並み保存制度、文化財保護法の改正で重要伝統的建造物群保存地区制度が1975年です。



一方、ヴァチカンはアッピア街道の保存には熱心でした。アッピア街道は、ローマからイタリア半島南端のブリンジ市の港に続きます。そこからギリシャのパトラスにアドリア海を渡り、アテネに至ります。そこからイスタンブールを通り、小アジア、トルコを通りエルサレムに行く道です。



この道は古代ローマ時代にもいろんな人が通りました。



その1人に聖ペトロがいます。サン・ピエトロは、エルサレムからアテネを経て、当時ローマで布教していたのですが、ネロ帝のキリスト教迫害が激しくなり、逃げ出し南に向かいました。この街道で、十字架を背負ったキリストと会い、「主よ、どこに行きたまうか」「Quo Vadis Domine」と聞くと「私の民のために、もう一度磔にかかりにローマに行く」と言われました。ペトロは、いろいろ思うこと、反省することがあって、覚悟を決めました。そして、ローマに戻って自分が磔になるっていうのが、「ペトロ行伝」という物語、これがヴァチカンの都ローマの最初の演出です。キリストと会った場所にある教会に行くと、笑っちゃうんですけど、キリストの足跡っていうのが大理石に刻んであったりしますが、こういう嘘と欺瞞の遺跡の発明っていうのが、つい最近まですごく流行っていたわけです。キリスト教関連の文化遺産の大半にはこうした物語があり、考古学的事実とは一致しません。

歴史的祭典「海との結婚」、今も伝わる



ヴェニス憲章（1964年）が書かれた1960年代には旧アッピア街道の保存が、その数年前にはサン・ピエトロ広場の整備がありました。それは、戦後のまだファシズムとかナチズム時代の価値観、それにキリスト教の物語性が非常に強く残り、モニュメンタルな保存が主流でした。そのため、厳しくオーセンティシティを求め、新技術でなく建設当時の部材と技法、科学的根拠の下で限られた復元、損傷箇所の補足は禁止を定めました。



必ずしも観光目的ではありませんが、ヴェネツィアの歴史的都心部でもすごい演出をします。続いてピサをお見せしますが、イタリア中の町でもむしろ戦後に、歴史ページェント（pageant）が盛んになり、日本の田舎町の仮装大名行列のようなことをします。京都の時代祭も同じです。戦後のページェントには宗教性はなく、演劇性も薄く、都市の歴史をアピールしました。観光よりも、町並み保存への市民意識を高める効果がありました。

その成功例がヴェネツィアです。戦後に保存が本格化し、カーニバルとレガッタが賑わい、1990年代に観光公害がひどかった時は人が溢れました。京都も今は観光客が多いって言いますが、当時のヴェネツィアの混み具合を知っている者からすると、確かに日本人より外

国人観光客が多くなったとはいえ、「まだ京都はガラガラ」って感じがします。でも、日本ではこんなに混んだ観光地がないので「混んでいる」となり、地下鉄にもう満員で乗れない時があるぞって、私が東京で勉強していた70年代の中央線は2回も3回も回も乗れないことがあったんですが、今はもう東京もすっかり空いているのでしょうか。



戦前のヴェネツィアは空いていました。イタリア統一でローマが首都になった1860年代から衰退が始まり、1895年からビエンナーレを始めました。その効果で夏は混みました。リド島が避暑地（海水浴）の豪華ホテルが並び、栄えましたが、冬は閑散としていた。そこで、カーニバルという市民参加のイベントを発明しました。それで冬にも客集まるようになったのが1930年です。



ピサの方も、もちろんカーニバルの影響を受けて、近くのピアレッジョが大にぎわいします。そしてヴェネツィアに習ってレガッタ、シエナに習って市内の地区対抗の橋上の合戦、

そして、その合戦に合わせて仮装行列を演出しました。



ピサには、ジェノバとかアマルフィとともに、ヴェネツィアと並ぶ4つの海洋共和国として地中海貿易に君臨した時代がありました。その後、フィレンツェ共和国との再三の闘い負けてトスカーナ公国の一地方都市になりました。でも、その自治都市の誇りを取り戻そうと、こういう市民参加型のお祭りが活発になりました。

こうした市民参加型の祝典が活発化したのは、1970年代です。当時、中北部の地方自治体（コムーネ）は、共産党など左派政党の市長や議会が多く、戦後の共和国憲法で定められた地方分権、州政府を一向に実施しないキリスト教民主党政権の中央政府にデモンストレーションをしていました。その意味もあり、統一前のイタリアが、百の共和国、自治都市や教皇領に分かれていたことを国民に思い出させようとしたのです。国民の結束を図るためにも、地方分権を唱えるためにも、歴史都市は演出されました。



これは、「聖ラニエリの夜」といって、キャンドル、コップに入れたろうそくを窓辺に灯すって祭です。このイベントは、まさに市民参加で、キャンドルは市が用意しますが。それを窓枠に据え付け、灯すのは住民です。これに似た行事が大昔にあったという話を聞いて、それを再現しました。これも、過度な歴史演出ではないかと批判的に見られます。もちろん一過性ですが観光効果はあります。町並み保存意識も高まりました。



京都も平安神宮をつくった時に時代祭りを始めました。1894年平安遷都千百年記念の内国博覧会の主会場となったパビリオンでした。よくできた大極殿の複製だったから、(とはいえ科学的に十分考証したわけではないですが、)撤去するのがもったいないと活用を考えました。博覧会施設(パビリオン)を神社に使うのには抵抗もあったらしいんですが、神社らしくなくてもいいんじゃないかとなりました。今でも、神社にこんな赤い建物あるかみたいな議論もあるのですが、百年もたてば見慣れてきます。

また、神社ならお祭りが要るとなって、併せて時代祭が始まりました。ご存知の方も多いと思いますが、これは旧市内の上京・中京・下京と東山の4行政区の元学区の自治連合会ごとに平安講社が組織され、連合会ごとに役、各時代の装束が割り当てられます。



こちらは葵祭の斎王代の行列、路頭の儀です。戦後1950年代に発明されたページェント

(野外劇)です。学生さん等が支えていました。休みの日だといいんですけど、今の学生は真面目に授業に出るので学生バイトが集まらない。一昨年から定年退職した爺さんたちが、この手伝いをやって、葵祭の行列もそうだし、時代祭りもそうだし、祇園祭りの山鉦の引き手もそうなんですけど、だんだん観光客も参加して下さるようになっていきます。いわゆる参加体験型観光っていうのをやっています。嘘と欺瞞ではないのですが、都市の歴史をイベントにします。説明が足りないと、平安神宮は平安時代の建物だと誤解する人が出てきます。

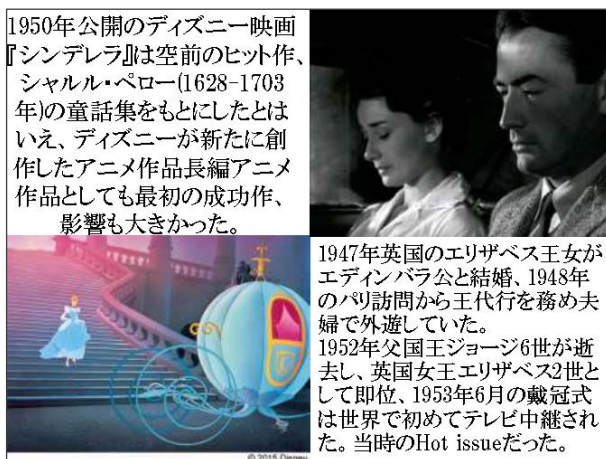
ヨーロッパ観光の簡単な戦後史

- 戦前は、18～19世紀のグランドツアーの影響が残り、主に、富裕階級が名所観光をした。1930年代、バカンスが普及し始めていた。
- 戦後、米国政府の欧州復興計画(マーシャルプラン)が農業、工業に加え、再開した鉄道利用で観光振興を図った。同時に民主化のために、文化の「大衆化」を進め、映画で平和と平等な社会をアピール
- 王侯貴族より、若い女性が西欧の歴史都市を楽しむ点を強調、ファッションと食事(買う・食べる、歩く)が観光行動が中心になった。
- その後『一日10ドルの旅』、『地球の歩き方』等へ

話がもう一度ヨーロッパに戻ります。ヨーロッパの中でも特にドイツやイタリアの戦後の文化財保護と観光では嘘と欺瞞に神経を使います。ローマはファシズムの街でしたから、戦後復興では、アメリカとかの影響もあってファシズム・ウォッシュをします。マーシャル国務長官が作ったヨーロッパ復興計画(マーシャル・プラン)では、ファシズム色の強い古代ローマ崇拝を排し、平和と民主主義に塗り替える作業に一生懸命取り組みました。観光を通じて諸国民の相互理解を深め、平和を実現しようというのです。



それが、この1953年のアメリカ映画『ローマの休日』なんです。どんな映画かっていうのはここでは説明しません。



この1953年っていうのは非常に微妙な年で、1950年に有名なW.ディズニーの『シンデレラ』が公開された。『シンデレラ』は、真夜中の12時になると魔法が解けて、王宮から逃げ出します。この3年後にヒットした『ローマの休日』は、12時になると王女様に戻っちゃう。全く逆です。当時、エディンバラ公と結婚したエリザベス王女が、国王ジョージ6世の死去に伴って、女王として即位した時期ですので、父王の名代でローマ訪問というのはリアリティのある話でした。戦後の民主主義は、王侯貴族を身近にし、こんな物語が描かれる時代になったという逆転劇でファシズム・ウォッシュが進みました。

ローマ観光の「文化的意味」を転換させた ローマの休日 (ROMAN HOLIDAY) という映画

- 1953年アメリカ映画,監督:ウィリアム・ワイラー、主演:
グレゴリー・ペック、オードリー・ヘップバーン(1953年
度アカデミー賞最優秀主演女優賞)
- ファッションと観光に大きな影響を与えた
- ローマを舞台にした物語で描かれた名所が次々と観
光地に、その後まずアメリカ人が、英仏独のヨーロッパ
人が、そして日本人が大挙して押し寄せる観光地とし
てローマを始めイタリアの都市が再評価！
- *Vacances romaines, Vacaciones en Roma,*
Vacanze Romane, 罗马假日, 羅馬假期

監督のウィリアム・ワイラーは、マッカーシー旋風と呼ばれた戦後のアメリカの赤狩りの被害者です。左翼系の人たちを指導的な地位、社会的影響力ある立場から追い出したマッカーシー旋風が吹き荒れた時に、ハリウッドから逃れてローマで映画を作った人です。単純なロマンスとして見てもいいのですが、丁寧にみるとかなり反戦的なのか、平和運動的な側面が見えてきます。

それはローマだけのことではない！ ヨーロッパの再発見:観光都市の登場

- 一部の知識階級に限られていたヨーロッパの主要都市の芸術文化(美術・音楽)は、戦後の大衆化(文化政策・都市政策)として進められた。
- 「文化ルート」が演出され、美術館(ルネサンス美術、印象派絵画)を回り、音楽(クラシック、オペラ)を楽しみ、買物をする観光客を大量に獲得することで、西欧諸国の経済は維持されてきた。
- 宗教、政治、経済とは別に、消費される「文化」を提供することで、世界中の観光客が西欧主要都市を回り、留学までするようになった。

この影響が、現代でもヨーロッパの文化遺産と歴史都市の景観、そして文化観光に色濃く残っています。文化遺産も観光も、この時からこの王侯貴族たちが楽しむ高級な、あるいは金持ちの道楽ではなくなりました。普通の町娘が楽しむような、特に女性が楽しむ、若者が楽しむ、平和な楽しいローマ、ロマンスの都市・ローマというイメージを作ったんです。この結果、それまで知識階級に限られていたヨーロッパの歴史都市っていうものが、大衆に広がっていきました。ただ、それにはもちろん良い面も悪い面もありました。



これはスペイン広場。これは、アザレアの花を飾った5月くらいの様子ですが、観光客はここに来て、映画を真似て、自由になった王女様の気分でアイスクリームを食べるようになった。彼が声をかけてくれるかもしれない。でも今はアイスクリーム禁止です。



世界中から若い女性が集まる街になったので、イタリアばかりかフランスやスペインからもブランドショップが並ぶような街になった。これは1980年代です。



ローマの休日のヘプバーンはフェラガモの看板に登場します。ローマの休日のヘプバーンは「シンデレラ」のメタファー。逆シンデレラ。ハリウッドで成功したナポリ移民のフェラガモ先代が女優たちに靴を作っていた。ヘプバーンを連れて、比較細工の本場フィレンツェに店を開きました。「あなたもこのフェラガモの靴を履けばシンデレラになれますよ」というブランドを創り、歴史的建造物を買ひ、有形無形の文化遺産を創造的に活用し、歴史的景観の中に現代の芸術街都市を作りました。観光客は、現代のフィレンツェに集まり、文化遺産を眺め、フェラガモの靴を買って帰る。そんなお金がなければ、キーホルダーでもお土産となります。ただ、フィレンツェの観光公害も激しく、背景を知らない観光初心者は遠くのアウトレットに誘導されます。



シンデレラ物語はさらに現代化し続けます。カミラ・カベロ主演の『シンデレラ』2021年版がNetflixから配給されています。ミュージカル仕立てで、女性の地位が向上していますから、シンデレラが仕事優先で求婚する王子様を振るってという女性上位のとんでもない物語です。20世紀後半にすっかり女性化した観光の未来を考える上で結構楽しいんですけ

ど。



文化的ないわゆるアイコンとしての「シンデレラ」「12時」と「靴」は、ローマ観光のキーワードとして、今も使われているわけです。こちらはファシズムと比べたらはるかに平和ですが、それもはるかに女性化していますけど、嘘と欺瞞の物語で歴史的都市を塗り込める使い方です。文化遺産を創造的に活用しているのです。

FRANÇOISE CHOAY, フランソワーズ・ショエ
L'ALLÉGORIE DU PATRIMOINE,
(文化遺産の寓話) PARIS, 1992

- ヨーロッパの発見: 歴史都市の建築遺産が世界の
大衆の憧憬の対象にクローズ・アップされた。
- 西欧都市が「ディズニーランド」の様に見て回る観
光地として整備され、巡回ルートが普及した。
- そのルートを整備・発展させるために文化遺産修
復、交通基盤整備、周辺環境整備が進められた。
- ヨーロッパを再発見させる。ヨーロッパを教えよう
という意図は、西欧諸国が戦後の経済的優位性確
立のため?
- その後、1985年にEUが始めた『ヨーロッパ文化
首都』の取組みに発展。*京都文化首都構想
- 世界はヨーロッパに文化の中心があると感じる。



ただ、ラスキンに代わり、これを非常に厳しく批判しているのが、『文化遺産の寓話』を書いたフランソワーズ・ショエです。ショエは、1994年の奈良会議の時のフランス政府の代表メンバーでした。オーセンティシティをなぜ議論するかと聞いたら、こんな欺瞞、嘘をいっぱいやっていたら、たしかに観光だから客は集まるが、ちょっとまずくないとか、あんまり大衆化してしまっただけで困るんじゃないかと考えたからです。ショエもその一人です。

もし、ヴェネツィア死せば
サルヴァトーレ・セッティス
GIULIA EINAUDI EDITORE, 2014
ヴェネツィアが高層ビルの陰に死ぬ



歴史的都市は、偽りの現代性、過疎化、自己忘却によって危機に晒されている。都市は3つの方法で死滅する。それは、冷酷な敵による破壊、外国人が強制的に住み着く(占領)、そして市民が記憶を失うという3つの危機による。ヴェネツィアは記憶と住民を失いつつあり、商品化され観光ホテルの飾りに墮した。

その流れを受けたイタリアの先生がサルヴァトーレ・セッティス。ピサのスクオーラ・ノルマーレと高等大学院の学長をなさった方です。『もし、ヴェネツィア死せば』、ヴェネツィアはどんどんそうやってディズニーランド化してしまっていて、そこにヴェネツィアの歴史も知らず、建築の歴史も美術の歴史も知らない、ただ物語だけを見に来るような人が増えちゃう。今はその物語すら知らない観光客が、ディズニーランド同様に溢れています。

バックパッカーは、低予算で海外を回る個人旅行者を指す。バックパックを背負い移動する。自由旅行とも呼ぶ。1960~70年代のヒッピー・トレイルにルーツがある。シルクロードを順番に辿った。今でもバックパッカーたちの一部はアジア中心に旅する。格安航空券がその発展を支えた。現在LCC普及でアジアの若者が登場している。当然、時代と場所によって、そのインパクトが大きいかった例もある。



京都には少ないのはなぜ？

大衆化の流れでは、もちろんバックパッカーが重要な役割を果たしました。よりチープな旅行だから、ただアイコンを求めて回っているだけになってしまった。



それが今、アジアにも LCC がどんどん広がって、急速に豊かになった東アジア、東南アジア諸国の若者に広がりました。日本の歴史をほとんど知らない若い旅行者が日本に溢れ、富士山、ゲイシャ、伏見稲荷、金閣寺、温泉を回っているのです。

紀元2600年とその記念行事

- ◆ 1940年は神武天皇即位紀元(皇紀)2600年に当たるとした。
- ◆ 橿原神宮や陵墓の整備など推進、「神国日本」の国体観念を徹底させるため神道を使った。橿原神宮整備には全国の修学旅行生を含め121万人が勤労奉仕、外地の神社である北京神社、南洋神社(パラオ)、建国神廟(満州国)などの海外神社もこの年に建立された。また、神宮皇學館を旧制大学に昇格させた。
- ◆ 政府は、日本が長い歴史を持つ偉大な国とを内外に示すため、年初の橿原神宮の初詣ラジオ中継に始まり、紀元節には全国11万の神社で大祭が行い、展覧会、体育大会など記念行事を全国で催した。
- ◆ 11月10日、宮城前広場で内閣主催の「紀元二千六百年式典」を開催、国民の祝賀ムードは最高潮に達した。

しかし、より深刻なのは日本でも文化遺産を嘘と欺瞞で塗り固めていた時代があったことを多くの日本人が忘れていることです。日本にもファシズムやナチズムと同じような時代がありました。神道が国家神道だった時代があり、帝国主義、軍国主義となり、周辺諸国を侵略しました。その時代、国民を欺き、戦争を正当化するため 1940 年に皇紀 2600 年の記念式典を盛大にやりました。日独伊三国同盟の時代でしたから、ファシズムやナチズムの真似もしたのだと思います。その舞台が、京都、奈良、橿原です。京都の御所や岡崎は皇国の古都として演出されました。そして、多くの国民が動員され、偉大な皇国の戦争を賛美させられました。



この記念式典が、初めてラジオで全国、当時は台湾や朝鮮半島や旧満州、南洋諸島にもですが、中継されました。近衛首相（当時）がこの式典を東京会場でリードし、万歳三唱しました。それがラジオで全国民が一斉に、まさに国家総動員が行われたわけです。1945年の8月15日の玉音放送の時に、国民が皆ラジオの前に直立して、一斉に天皇の声を聞いたすごく不思議な、考えてみるととても奇異な行動を見慣れています。もちろん今、そんなことできないわけです、それはこの5年前の1940年に、この式典があったからできたとされるわけです。1940年当時は、文化遺産が皇国の偉大な歴史を演出するために使われました。



その式典のために整備された神社の代表が橿原神宮です。平安神宮の周辺、岡崎界限も、その時にまた整備されたわけです。もちろんお伊勢さんも、皇大神宮として整備され、橿原と並んで伊勢の参拝が奨励されました。



今は奈良県立橿原考古学研究所があるところです。明治時代に、市民有志により創建された新しい神社です。東京大学建築学科教授の伊藤忠太が設計しました。

橿原神宮

- 記紀では初代とされる神武天皇を祀るため、神武天皇の宮（畝傍橿原宮）があったとされる地に、橿原神宮創建の民間有志の請願に感銘を受けた明治天皇により、1890(明治23)年「官幣大社」として創建、国家的事業だった。
- 1940(昭和15)年には、紀元2600年奉祝式典が挙行、参拝者は約1000万人に達した。
- 近代の創建だが、奈良県内では春日大社と並んで初詣の参拝者数が多い神社。紀元祭(2月11日・建国記念日)、春の神武祭(4月3日)にも多くの参拝者が訪れる。
- 神武天皇御陵の南側に奈良県立橿原考古学研究所及び付属博物館がある。また、付近は多数の陵墓がある。

記念式典では、その整備のために朝鮮半島からも、あるいは満州からも、あるいは信託統治だったパラオからも、この奉仕に多くの若者が集められました。日本は、こうして国家総動員として国民を戦争に駆り立てた国なんです。

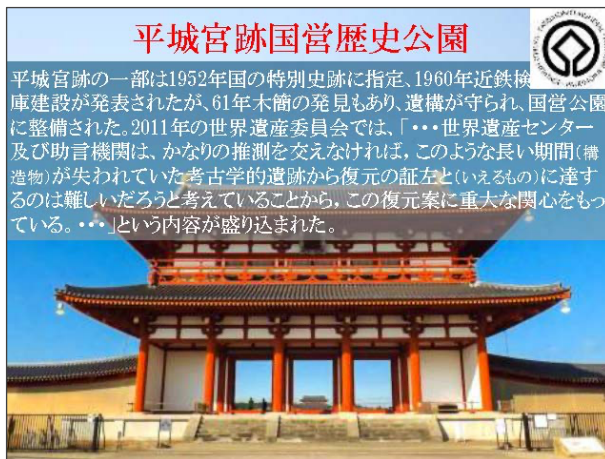


こうして日本でも嘘と欺瞞で、近代軍国主義国家の古都を築き、平安神宮や橿原神宮を作ったわけです。これを時々、地元の京都新聞が面白おかしく紹介します。北海道から来た大学生が、中学生じゃなくてもっと大きかったと思いますけど、京都は良い素晴らしい歴史都市だ、平安時代の建物を今も大事に守っている、素晴らしいことだって言われるけど、これにどう説明し、解釈してもらえばいいかっていうことになります。

太秦には映画村ってあるじゃないですか、映画村に行って、着物を着て、かつらを被って、ちょっと端役の娘になって体験するんですけど、「ここは映画村だからいいね、大部屋女優さんの格好ができて」っていう人と、「いいね、江戸時代の娘さんのコスプレができる」っていう人、でも中には江戸時代の歴史を体験したと誤解する人がいるのです。時代劇という虚構の大衆娯楽も今は大分衰退しました。多くの文化遺産同様、映画村も観光施設です。嘘と欺瞞のレベルによって観光客の感じ方もだいぶ違ってきます。



戦後もしばらくは、修学旅行が平安神宮を避けていました。戦前の日本をどう捉えるかっていうことを、まさに観光のオーセンティシティの議論の中で出てくると思います。



平城宮跡国営歴史公園

平城宮跡の一部は1952年国の特別史跡に指定、1960年近鉄検車庫建設が発表されたが、61年木簡の発見もあり、遺構が守られ、国営公園に整備された。2011年の世界遺産委員会では、「・・・世界遺産センター及び助言機関は、かなりの推測を交えなければ、このような長い期間(構造物)が失われていた考古学的遺跡から復元の証左(といえるもの)に達するのは難しいだろうと考えていることから、この復元案に重大な関心をもっている。・・・」という内容が盛り込まれた。

一方、世界遺産平城宮跡の一部は 1952 年国の特別史跡に指定しましたが、1960 年に近鉄検車場と車庫の建設が発表されました。翌 61 年に木簡の発見があり、市民運動もあり、広大な遺跡が守られ、その後は国営公園として整備されました。ただ、2011 年の世界遺産委員会では、「・・・世界遺産センター及び助言機関は、かなりの推測を交えなければ、このような長い期間(構造物)が失われていた考古学的遺跡から復元の証左(といえるもの)に達するのは難しいだろうと考えていることから、この復元案に重大な関心をもっている。・・・」という内容が盛り込まれました。国内ではあまり報道されませんでした。文化庁の HP には記載されています。



百舌鳥古市古墳群

その後、2019 年に百舌鳥・古市が登録されました。京都や奈良では慎重に扱われていた天皇に関わる文化遺産です。考古学的認識と記紀的記述の違いから名称にも議論があります。その前の明治日本の産業遺産、いわゆる稼働資産のこともありましたので、古墳群の推薦書では、天皇色を薄めることを、対中国・対韓国の視点で考えてきました。





だから、例えば、いたすけ古墳。これは日本で戦後最初に市民による保存運動が起こって、開発から守られました。今は、これスタジオジブリの『平成狸合戦ぽんぽこ』をイメージし、たぬきが住んでいる里山としてのイメージを前面に出し、自然保護や狸マニア、そしてジブリのファンの人たちにも保存を支えてもらえるような配慮を尽くしています。



でも、それをこういうように復元して、史跡整備の専門家はどうも復元がお好きなようです。ご研究の成果を、国民の税金を使ってでも、夢を形にしたいのでしょうか。いろんな古墳の整備の仕方ありますが「こうするのが望ましいか」って話の際には、世界中で展開された、嘘と欺瞞の文化遺産の壮大な歴史を思い出します。

**川端康成『古都』新潮社、1962年
朝日新聞1961年10月～1962年1月**

- 捨て子だった商家の一人娘千重子は祇園祭の夜、自分に瓜二つの村娘苗子に出逢う。古都の深い面影、四季の移ろい、由緒ある史蹟を織り込み、流麗な筆致で描く美しい長編小説。
- 戦後の京都の観光案内としても人気を集めた作品：
祇園祭、葵祭、時代祭、北山(中川集落)、平安神宮とその庭園、嵯峨野、植物園、四条通、清水寺、仁和寺、錦市場、上七軒、呉服、京料理、町家暮らしetc.

映画2本、ドラマ6本

京都に関しては『ローマの休日』の1953年からちょっと遅れて、朝日新聞の連載小説で川端康成の『古都』が、それを度々映画化していますよね。

『古都』
2016年12月3日公開



- 監督: Yuki Saito (さいとうゆうき)
- 主演: 松雪泰子(二役)、橋本愛、成海璃子
- 舞台を現代にし、千重子と苗子、その娘たちを描くという形にアレンジ、同志社から繊維商社に就職を嫌いパリに行く娘とパリで絵を学ぶ娘。



また、これはヒットしなかったのですが、ご覧になった方はいないと思いますけど、2016年に『古都』のリメイクをしました。現代の歴史都市がどうイメージされ、そこ暮らす、そしてそこを訪れる人々の人生にどう関わるかを見せてくれます。様々な文学作品に登場する文化遺産や歴史都市は、「嘘と欺瞞」というより、「夢と思いこみ」の文化遺産と言う方が相応しいかもしれません。リメイク版の文化遺産がアートを生むという立ち位置は、ルネッサンスの始まりを思わせます。

古都京都の文化財(17の社寺)

- 賀茂別雷神社(上賀茂神社)
- 賀茂御祖神社(下鴨神社)
- 教王護国寺(東寺)
- 清水寺(地主神社を含む)
- 延暦寺
- 醍醐寺
- 仁和寺
- 平等院
- 宇治上神社
- 高山寺
- 西芳寺(苔寺)
- 天龍寺
- 鹿苑寺(金閣寺)
- 慈照寺(銀閣寺)
- 龍安寺
- 西本願寺
- 二条城

こうやって京都という町の物語を作ってきたのですが、今の百舌鳥・古市古墳群の話にあったように、古都京都の文化財は1994年の登録です。法隆寺、姫路城の翌年です。



その際には、天皇に関わるもの一切抜きました。



京都には、もちろん御所もあるし、桂離宮も修学院離宮も、実は陵墓もたくさんあります。けれども、1994年の段階では、王権、天皇にまつわるものは登録していません。文化庁所管ではなかったこともあり、あまり議論しませんでした。平安遷都 1200年の翌年は1995年、戦後50年に際しての村山談話が前後の時代背景もありました。



それに対して、1990年代は町家ブームの時代です。京都は町衆の町だったということをPRしました。ローマの休日のやり方です。2008年の源氏物語千年紀まで約十年、京都観光の女性化を進めました。



町衆の町のこういう文化遺産を使って、新しいアートが起こって、新しいファッションが生れてくる、新しい食文化が生れてくるというようなことを演出したのです。



京都が平和な、いわゆる世界遺産は UNESCO の平和運動のシンボルですから、そういうことを言いたかったのです。その後、町家ブームは全国に広がりましたが、形だけ真似た、古い建物を再生しホテルやレストランに使うと人が集まるという表面的なものに見えます。

歴史観の変遷～歴史への眼差しの変化



修史の詔、国史編輯事業、国学から尊王思想へ
 ・『大日本編年史』編纂事業、儒学的教授方式
 ・西洋的史学による歴史研究と教育/公教育の中の観光



皇国史観（新皇正統記、水戸学、国学、尊王攘夷）
 ・江戸時代末期の尊王攘夷思想、平田篤胤流の国学、
 ・記紀と万世一系の国体、神話から歴史へ、戦後の考古学へ



唯物史観：資本主義の論理を考察し社会主義革命へ
 ・ヘーゲルの弁証法とフォイエルバッハの唯物論
 ・マルクス『経済学批判』序言、生産力と生産関係の矛盾



社会史と民衆史：武士の家計簿からFamily History
 アナール学派（フランスからイタリアへ）の影響下に社会史
 政治史・経済史から離れ名もなき民衆の生活史を研究

歴史学や文化財の専門家でない意識されることは少ないのかもしれませんが、国民の皆さんには様々な歴史観があります。戦前は皇国史観でしたが、今もそれを引きずっている方がいます、一方、戦後は、我々が中学・高校生の頃ですが、唯物史観が流行っていました。その後、アナール学派が登場しました。私がイタリア留学した時はギンスブルグの「チーズとうじ虫」が出版された時代、だから歴史都市のマイナーな建築の保存が中心でした。日本でも、その後「武士の家計簿」が話題になりました。今では「ファミリー・ヒストリー」がブームなのでしょう。

歴史好きの実態～歴史小説と時代小説～



江戸時代の講談から明治の大衆小説へ
 ・島崎藤村『夜明け前』、森鷗外『歴史其儘』
 ・吉川英治『宮本武蔵』、子母沢寛『新選組始末記』



戦後の歴史小説ブーム
 ・山岡荘八『徳川家康』、『春の坂道』
 ・司馬遼太郎『竜馬が行く』『坂の上の雲』



時代小説と時代劇、映画とテレビ
 ・池波正太郎『鬼平犯科帳』
 ・藤沢周平『蝉しぐれ』、ナショナル『水戸黄門』



外国の歴史も題材に生れたヒット作
 塩野七生『海の都の物語』『ローマ人の物語』
 ヤマザキ・マリ『テルマエ・ロマエ』

それ以前に、多くの日本人の歴史好きは、歴史小説、時代小説好きのレベルです。だから天守閣に泊ってみたい、流行した忍者マンガのコスプレをしてみたいという観光が人気です。コスプレを楽しむという方々です。でも、もう少し深い体験ができないでしょうか。



だから、欧米や京都の歴史都市では、世界遺産を市民の近いところに置いておくってことをしています。



町家ホテル、私も関係者だったので、今日の午前中も京町家再生研究会の幹事会に出ていましたけど、この町家を民泊に使うのってというのは随分抵抗がありました。実際、火災の危険、地震の危険とかいっぱいありますから、消防局と色々な実験をし、色々な耐震補強と消火設備の点検をして作ってきたわけですが、それぞれの自治体消防の中で適切な安全策を講じられると思いますけど、今でも政令市 20 市の中で一番木造比率が高い町家なものですから、とても怖い状況というのがあります。



こういう町をつくっていく時には、当然不燃化、耐震化する必要があります。



だから、決して町家だけでいいとは思ってなくて、景観政策で高さ規制をする反面、デザインガイドラインを作って、新築の建物の方からきれいにしてきました、



ホテルにもこういう格子の設置や庇を求め、古都京都らしい風情を作っていくっていうことをしていますが、このような景観政策、そのガイドラインを用意する際にも、政治的な側面ももちろん意識します。我々は、京都やローマ、それからベルリンとか、いろんな国がつい70年、80年ほど前に、歴史都市の壮大な景観を演出し、間違った使い方をしたっていうことを忘れることはできません。



もう時間なので最後です。任天堂はご存知だと思います。任天堂の旧本社ビルと社長さんのお宅が繋がっていたのですが、1930年代の終わりに、アールデコ風に作ったものがあって、この建物を今、安藤忠雄がリノベして、ホテル丸福楼として1泊3万5000円くらいの高めのホテルになっていますが、とても人気です。



任天堂のホテル丸福樓

任天堂の歴史展示があるんです。京都の河原町六条って言いまして、五条と七条の間の鴨川沿いにあるんですが、元々遊郭があったところで、会津小鉄会っていう山口組と闘争した暴力団の本部があったところですね。昔は賭場、博打やったところですね。

観光は、世界でも日本でも、ずっと長い間は、飲む打つ買うっていう3つの悪いことが付き物でした。その一つのお道具の花札を作っていた任天堂さんが、世界の任天堂になった。だから、それをクレンジングするとか、ブラシュアップするとか、綺麗にしまして、お酒も、それからもちろん売春も賭博もない、綺麗な町になったんですが、こういうことも文化遺産の一つのモニュメンタルな使い方っていうことになります。

世界遺産はユネスコの平和事業

- 世界遺産も文化財も観光資源と言われるが、それは観光事業者の期待に過ぎず、観光効果はない
- ユネスコは平和事業として、戦禍から人類が共有すべき遺産を守り、国家や民族の対立を止めようとした
- やがて世界遺産リストの偏在が問題に、途上国には自然遺産は多いが文化遺産が少ない。文化が伝わらない？だから多様な文化遺産を増やす努力が！
- 世界文化遺産は、伝承遺産、記憶遺産、そして無形文化遺産として発展し続けている。
- 文化の違い、文化の多様性を認めることができる？

世界遺産は UNESCO の平和事業ですから、我々が、戦争の記憶とか間違ったナショナリズムとかっていうものから、どう文化遺産を守るかということと、その間違った使い方を避けるかっていう、歴史を伝えてく上でどうしても欠かしてはいけないような発想が、務めがあるっていうことをご理解いただきたいと思います。

文化遺産の誤解、ホンモノって何？

- “歴史観”は変わってきた。“歴史”とは解釈、現代人が都合のいいように解釈を変えてきた。人はそうして心の安定を保ってきた。
- 人々も歴史観を共有して仲良く暮らしてきた
- “文化遺産”も同様に、歴史観に沿って都合よく演出されてきた。度が過ぎると「国民を騙している」と言われる。
- こうして、文化遺産(財)保存は、権力者に都合いいように使われたから何が「ホンモノ」か疑ってかかり、自分自身の眼(教養)で厳しく対応する。

時代は変わった。だから、歴史の解釈がどんどん変わっていく。それはしょうがない。だから、オーセンティックなっていうことを歴史に求めてはいけないし、観光っていうのは往々にしてこの間違っただけの解釈で煽られて、軍国主義に走ってしまう若者を助長するような使われ方をした。逆に今度は、大衆化してしまう間違っただけの使われ方もしてきた。その中で、その何が本物かっていうのは自分自身の力で疑ってかかる。自分自身の目で疑ってかかるだけの教養を持たなきゃダメなんです。無批判に喜んで使うのをディズニーランドっていうわけで、誰もミッキーマウスは疑いませんよ。良い人なんです。ミッキーマウスはね。ただ実際、我々の現実の社会の中には、ミッキーマウスばかりではないので、そこをどう捉えるかっていうことが正しく文化観光してもらおう、そういう問題なんだろうと思います。はい、長くなりましたが、これでおしまいにします。ありがとうございました。

5. パネルディスカッション・質疑応答①

桑原 宗田先生、ありがとうございました。国内外の多数の事例を基に、非常に興味深いお話をいただきました。誠にありがとうございました。宗田先生のご参加時間が限られていますので、ここで一旦、宗田先生のご講演に対する質疑の時間を設けたいと思います。よろしくお願い致します。

池上 ものすごく面白かったです。ありがとうございました。ちょっと聞き入ってしまいました。（この後、自身の講演となりますが）実は言いたいことは極めて一緒だったと分かりました。それで、この正しい正しくない、正しくないといけない理由って何だろうというのが、この後の議論のためにちょっと一つ伺いたいと思います。やはり文化遺産は正しく使わないといけないですけど、目的が戦争の高揚などに誤って使われるというようなことがある場合以外に、正しくなくてはいけない理由は何だろうってというのが1つ目の質問です。もう1つは、やはり、後になるとやはりその当時のもの、過去のは文化遺産になる。そう考えると、六本木ヒルズもあと何十年か経つと文化遺産になるのかな、というのがあるのですが、この2点についてご意見伺ってから後半の方に議論できればと思いました。いかがでしょうか。

宗田 六本木ヒルズは文化遺産になるでしょう。東京タワーももちろんなるし、丸ビルは壊したが、東京駅は残った。それは、個々の建築の後世の評価で決まります。

正しくなくてはいかんのかっていうことは、ないです。正しいものがないからなんです。正しいものがないんで、我々は疑い深いんです。研究者の皆さんそうだと思いますけど、最初から疑ってかかりますよね。疑問精神を持たなかったから、ファシズムに走ったわけです。今は、ポスト・トゥルースとかって我々が言うのは、そういう疑問を持たない、無批判な連中がたくさんいるわけです。だから、こういうポスト・トゥルース時代だからこそ「観光は疑ってかからなくてはだめなんだよ。フェイクニュースに騙されるよ」っていうことを私は言いたいんです。トランプに惑わされてはダメなんです。歴史を深く、避難的に理解しなくてはダメなんです。観光が、ポスト・トゥルース時代を意識しなかったら、もうほとんどこれトランプの虜ですよ。イタリア人は、ムッソリーニの虜だったんです。それで戦争に走って、ボロボロに負けて、あの暗い暗い戦中戦後の時代を送ったわけです。今同じようなことをロシアでやっているじゃないですか。ロシア人は歴史的に、ファシズム、ナチズム、 Kommunismus に苦しんだのに、プーチンという、かつての Kommunismus の

手先を大統領にして、大衆を扇動することに長けた人に言われて戦争しています。その時に、一番便利に使いやすいのが文化遺産なんです。でも、その文化遺産を無定見に使われるのが観光なんです。

皇紀二千六百年行事に、なぜあんな大勢が動員されたのか、それは戦時中でふつうは旅行できなかった。私的な観光はほぼ禁止でした。でも、伊勢、奈良、橿原、京都を回る皇国巡行ツアーだけは切符が買えたんです。だから、ちょっとお金がある人が、もう生き苦しいな、もう中国との戦争が早く終わらんかなって言いながら、家族を連れて奈良、京都の観光に行ったわけです。そうやって大衆を動員しながら戦争に向かって走らせたわけです。だから、正しいからではないわけで、あの時それ疑ってかかる人はほとんどいなかったから、日本は悲惨な戦争に走ったわけです。観光っていうのは、お互いの国をよく知り合うってことだから、変にプロパガンダに乗っからずにとりょうな正しいものを求めるのは、まさにそういうことだと思います。正しいものでも疑ってかからなくてはいけないから、その疑う気持ちがあるから外国まで行って異文化を自分の眼でみることなんです。

池上 確におっしゃる通りで、そうでないと、アートや文化はプロパガンダにも使われますし、そうすると、それを指す方向のメッセージにも使えるので、ダブル・エッジ・ソード（諸刃の剣）なのでしょうね。だから、クリティカル（批判的）に見なくてはいけない、そういう考え方ですよ。

宗田 そうです。私、何年か前に『インバウンド再生』って本を書いた時に、外務省の方々から呼ばれて話をしました。インバウンドのプロモーションで外交上大事なことは、中国とか膨大な観光客が日本に来てくれた時に、民主主義って良いぞ、人権を守るって良いぞ、この日本って素晴らしい国だろうってことを伝えたいんですね。中国の一方独裁では、限界があることをアピールしたい。日本の文化遺産を見せるだけじゃなくて、文化遺産を守っている日本という国になるまでの長い道のりと併せて、我々の平な感覚、人権を大事にする感覚、そんな社会を見て欲しいわけです。だから、そのために役立つような文化遺産の活用をしてもらえば良い、だから、例えば、暮らすように旅するって京都で一生懸命やっていますが、あの町家ホテルとかをやっているのは、あそこに東京のお客様とかもちろん、インバウンドでもいいんだけど、来てもらって、お着物に着替えてもらって、今日は南座、明日は金剛能楽堂だとかって言いながら、京都の暮らしを楽しんでもらう。料亭に行ってもら。そしたら、そこに来てくれた観光客は着実に京都の町は残した方がいいと思っ

てくれます。京都ファンを作って、クラウドファンディングをやって、重文の京町家の杉本家はまたたく間に1週間で3000万円が集まりました。だから「あなたも京都市民よ」っていうことで、守る側、文化遺産のカストードイアンになってくださいってやるわけです。そのために、まがい物じゃなくて、本当の京都の体験をしてもらわなければならないから、お着物に着替えていただいて、伝統産業を守ってくださいね、和食を食べていただいて、和食は文化財になったんで守ってくださいねとかってやって、それで世界遺産都市京都を守るためにご寄付くださいねってやる。そういうカストードイアンを増やしていきます。カスタマイゼーションと言いますが、そういう使い方を今後もっと考えるべきだと、私は思っています。そういう仕組みで、京都は観光政策を作っています。

池上 なるほど。この後の議論に、非常に良いテーマをいただいています。他の方のご質問はどうでしょうか。このままずっとパネルをしたい気になっていますが、皆さんからご質問はいかがでしょうか。山田さん、どうぞ。

山田 非常に面白いお話、ありがとうございます。とても面白かったです。様式論争のこともあったと思いますが、例えば最近、川越の方に行って驚いたのが、新築の町屋の店蔵がどんどん出来てきている。川越は（広報としては）小江戸と言いつつ、明治にできている街ですが、完全に新しい（けれど外見上は）忠実に作られている店蔵ができています。これを、宗田先生はどういうふうにお考えになりますか。

宗田 何が問題なのですか。

山田 別に問題だと思いません。例えば、様式論争で、過去の様式を持ってきて作るということは、ある意味、偽物を作っているということになっています。

宗田 いや、そんなことはないですよ。それを偽物だとする理由がよくわかんないけど、それが明治初期のものだっていったら偽物になりますけど、現代建築として作っています。平城宮跡の場合は難しいのは、本物に似せすぎて作った展示施設なんで、誤解を招きやます。川越の店蔵の場合は、もちろん木も使っていますが、今の建築基準法で作っています。景観ガイドラインに沿った新築です。建築全く異質なものじゃないですか。

山田 はい。もちろん（そうです）。

宗田 だから、いわゆる素人とかが見たらわかんないかもしれませんが、これは新築だ
なって分かりますよね。昔建築を勉強した年配の人は、いわゆる国際建築、インター
ナショナルイズム、モダン建築は、機能主義建築で。それが全盛の時代の人は、箱
型の建物でないと、なんか無駄をしているみたいに教育されたので、過去の様式を
嫌うんです。今は、いわゆる新古典派とかポストモダニズムという時代なので、建
築が様式を持っていても悪いとは誰も言いません。パリでもアメリカでもネオク
ラシックなスタイルはあります。だから、別にまがい物とは見なくてもいいと思
うんです。一方日光江戸村とか、太秦映画村とか、伊賀上野の忍者屋敷とかっていう
とまずいかもしれません。あれはお客を騙すような装置になっています。その辺は
何がフィクションで、何が歴史かっていうことです。質の良い展示と質の悪いフェ
イクの違いです伊賀上野には忍者村がある反面、伊賀上野城は昭和初期の再建で
すが、関野貞、東大の建築史の教授が来て、丁寧に考証しました。その息子さんの
関野克さんも東大の歴史、建築の教授、日本 ICOMOS の初代会長です。これが城
郭建築の復元手法の一つの基準になっています。今、天守閣ってというのは、ヨー
ロッパ的に言うとなんかすごいマッチョで、エレクトラコンプレックス、高いもの好
きだよとか、なんか男らしいものが好きな国民、東洋の田舎者と思われてしま
います。マッチョな側面を消し上手に見せる。もちろん時代考証をちゃんとやって
います。平城宮跡の展示ではヨーロッパの専門家から批判されたので、慎重にやる必
要があるんだけど、川越はそんなひどい状況にはないと思っています。

山田 はい。僕も川越をよく知っていますけれども、言いたいのは 1931 年のアテネ憲章
ではなくて 1933 年 CIAM の方のアテネ憲章でも、やっぱり（歴史的建造物と同じ
様式を用いた新しい建築を）混ぜるべきではないというふうに、（歴史的地区に）
古い様式を持ってきて偽物を作るべきではないみたいなこと書かれている。ヨー
ロッパではあの頃、思想としてあったわけです。日本だと修景とかそういったもの
が流行って、ファッションとしてファサードだけ変えるみたいなことをすると、ち
よっと例えば…。

宗田 だから、あれですよ。いわゆるファサード一皮分だけ保存するもので、今も批判
されています。最近、ヴェネツィアで建てられたものの中に建てる、『build in built』
っていう本が出たんですが、それではファサード保存も肯定的に捉えていて、歴史

都市に対してインターベンション（介入）する時に、いろんな方法があることを主張しているんだけど、それはそれで良かったんだと。いずれにしろ、今先生がおっしゃった当時のインターナショナリズム宣言でもあった CIAM のアテネ憲章で、まがい物はもちろん禁止しているんだけど、逆に、保存する目的のために「中の住民に不健康なことを強いるな」「封建的な社会の残滓の中に残すようなことあってはいけない」「日当たりが悪いとか、風通しが悪い」という貧困の中に、人々を残すような目的で街並みの保存をしてはいけないっていうことを言っています。それが中心です。CIAM は結核がまだ蔓延していた中で、貧しい人々の生活水準を上げることが最大の目的、ヒューマニズムだったわけです。その一人コルビュジエがその後、グロピウスと一緒にアメリカに行き摩天楼を見て、合理主義の限界を見て、1937 年にパリで『伽藍が白かったとき』っていう名著を書きました。アーツアンドクラフツのモリスの流れを汲むような価値観で、職人たちの地位の向上を訴えます 2 つのアテネ憲章を比較されるのはとても良いことです。色々学ぶこともあります。文化財保存と都市計画の学識を踏まえた上で、現在の歴史まちづくりを考えるいい教材です。

山田 ありがとうございます。

桑原 ありがとうございます。宗田先生のお話は本当にまだまだお聞きしたいところではあります。

宗田 長引いてしまって、すみません。

桑原 とんでもございません。ありがとうございます。

山内 桑原さん、1つお話してもいいですか。山内です。宗田先生、ありがとうございました。今日のスライドをシェアして欲しいくらいです。こんなにコンパクトにまとめていただいてありがとうございました。

伊賀の忍者屋敷のことで少しお話ししたくて、私、多分この中で一番最近、忍者屋敷の案内を英語で受けてきました。マイケル・ターナーのお兄さん夫婦を連れて行ったのです。4年ぐらい前に行って、その時の案内の方が英語でやってくださる方で、彼女は女性で忍者の格好もしているんですけど、忍者がこういう格好をしていたかどうかはわかりませんと言いながら、説明はとても良かったのです。それで、

本当の忍者というと甲賀と伊賀という場所があるので、見に行ってくださいね、と言っていました。その他に、表でもっと派手にスモークを炊いたり、手裏剣をピューーンと投げたり、エンターテインメントとしてもやっていて、私は時間的にショーには行けなかったですけど、外から聞いていると皆が大喜びしているのはわかりました。もちろんマイケル・ターナーの知識あるお兄さん夫婦はとても喜んでいましたが、忍者がもちろん違うこともわかっていましたし、ミュージアムに少しずつ英語も増やして説明をしていました。だから、努力が見られました。また、(本日)下間さんもお参加いただいているので、下間さんが話してくだされば良いのかもかもしれませんが、この間、國學院で行った村上の町並みで、皆さんが努力されて、修景というか(新たに)作っているところがありました。川越よりももっとどんどん新しく古っぽく作って。でも、とても良い町並みを作ってらっしゃるところもあったので、お話を付け加えさせていただきました。宗田先生、ありがとうございます。

宗田 いえいえ、すみません。ただ、今、忍者屋敷もそうだけど、伊賀上野は坂倉準三の市役所の建物の保存運動が起こっています。コルビュジエの弟子だった坂倉準三が『伽藍が白かったとき』にあるように、上野城の眺望景観がピシッと守られるような設計をしました。さすがコルビュジエの弟子って感動しました。その意味では、当時の伊賀上野は今の東京の上野よりずっとパリに近かったと話してきました。

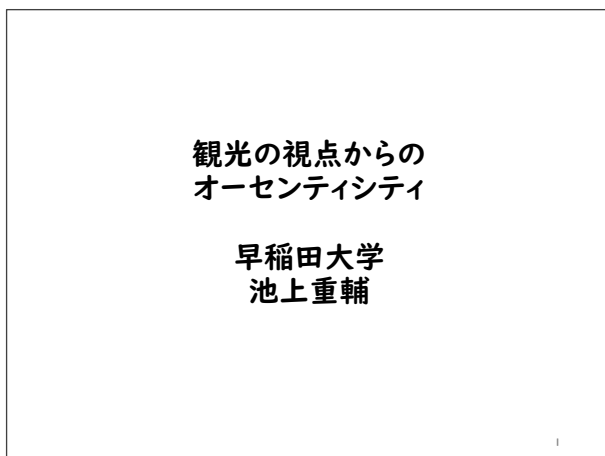
桑原 では、よろしいでしょうか。

宗田 ありがとうございます。すみません、私、日本の京都研究会の案内があるので、これで退出します。

桑原 ありがとうございます。それでは、講演②の方に移りたいと思います。池上先生、ご講演の方よろしくお願い致します。

6. 講演②「観光の視点からのオーセンティシティ」

(池上重輔)



早稲田大学の池上です。よろしくお願いします。むちゃくちゃ面白かったですね。今、ものすごい勉強になったんですけども、なんかでも、言いたいメッセージって一緒だったのかなと思う。宗田先生前段を繋いで言うと、僕の方では観光において話で、先ほど宗田先生は「本物」があれば観光うまくいくんですかって問いかけました。たしかに「本物」の観光資源か否かは観光においては重要な論点なんですね。でも、それでは「本物」の資源があれば来てくれるのかとか、逆に言うと、「本物」の観光資源、さっき言った真正性がなければ観光客を呼べないのかっていうのが論点になっており、そこで、観光で使うところのオーセンティシティという概念をどう扱うかというのが、なかなか難しく、面白いテーマになっています。

「真正性」から「本物感」へ

立命館・寺崎先生による田中祥司准教授(摂南大学)へのヒアリングから:

- ・ プロダクト・マーケティングでは任意の対象に対して消費者が主観的に感じる本物の程度としてオーセンティシティを捉えている場合が多く、本物感と解釈されるようになったという。
- ・ さらに、歴史的または芸術的に「本物」である場合は真正性、マスプロダクトの場合には本物感という訳語がしっくりくと述べている。
- ・ 以上の議論から、真正性は対象の特質自体を、本物感の対象から得られる受け手の所感をそれぞれ重視した意識であるといえる。

出所:寺崎(2019)及び本人へのヒアリングをもとに作成

3

元々は、オーセンティシティは、「本物」、「真実」っていう特質として定義をされていま

した。今回多分、文化財保護という宗田先生のエリアと、マーケティングにおけるオーセンティシティという話と、観光におけるオーセンティシティという3つの視点がある。マーケティングの分野では、過去の意味は真実・本物だったのが、その後は「真正性」とか、「本物感」というように少し定義が変わってきているというのが、まず最初の大事なポイントとしてあります。ただ、オーセンティシティの概念は研究者によって色々です。

はじめに

- ・ 観光の論点の一つにオーセンティックな、つまり「本物」の観光資源の有無が挙げられが：
 - 観光客は「本物」の観光資源さえあれば来訪するのか？
 - 何らかの「本物」の観光資源がなければ観光客を呼べないのか
- ・ こうした問いに対する一つのアプローチがオーセンティシティ (authenticity) という概念
- ・ オーセンティシティ：
 - 「『本物』ないし『真実』であるという特質」 (Deuter et al., 2015, p. 87)
 - マーケティング関連の文献では「真正性」「本物感」と訳される (e.g. 田中, 2013; 田中・高橋, 2016)。

・ しかしながら、オーセンティシティ概念は研究者によってその捉え方は一様ではない。

出所: 寺崎 (2019) 及び本人へのヒアリングをもとに作成

「真正性」から「本物感」へ、ということで、これがなかなか面白いのですが、

観光分野におけるオーセンティシティ

- ・ 元々は人工的ないし擬似的なものの対立概念として捉えられてきた。
- ・ Boorstin (1962) の見解
 - 旅行者 (traveler) と観光客 (tourist) は本質的に異なるとし、旅行者が「真正なコト」を探求しようとする一方、観光客は現地の人々によって催される何か面白いコト、つまり擬似イベント (Pseudo-event) を待っている人々であるとした。福岡市は観光するところがないという声があるが (毎日新聞, 2023)、旅行者視点で見れば、古代の歴史遺産などたくさんあるのではないだろうか
 - 観光客を標的としたアトラクションは例外なく人為的で擬似イベントの様相を呈しており、本来あるべき場所を離れた文化的産物が集積するという意味で美術館もその一例であるという。

・ そもそも観光客の全てが「真正性」という意味でのオーセンティシティを求めているわけではなく (Cohen, 1988)、たとえ擬似的な体験であっても多くの観光客がそれに満足している。

出所: 寺崎 (2019) 及び本人へのヒアリングをもとに作成

ブーアスティンのように旅行者と観光者というのは、実は本質的に異なるという定義もあって、だから旅行者はやはり真正性を求めるのだけど、観光客というのは、何か面白いものがあればいいと、擬似イベントがあればいいという話になってくる。観光客をターゲットとしたアトラクションというのは、ほぼ例外なく、疑似イベントになってきているというのを、実は前段でもお話してきました。ただ、厳密に捉えると、先ほどありましたけども、

実は、我々は真正だと思っているかもしれませんが、美術館も、本来あるべき場所を離れて文化的遺産が集積しているという、実は、美術館にある物としては本物でも、真正性がないのではないかなど、どのくらい厳密に言うかによって、真正性というのは変わってくるということです。観光客は、別に真正性という意味でのオーセンティシティをそれほど求めていないのではないかというのが、割とリアリスティックな見方でありました。

<p>観光分野におけるオーセンティシティ</p> <ul style="list-style-type: none">・創発するオーセンティシティ (emergent authenticity)<ul style="list-style-type: none">- 土産物のような商業的な目的で作られた非真正的なものが、時間の経過にともないオーセンティックなものとして認識されていく場合があり、このような過程 (Cohen 1988)- オーセンティシティには静態的というより動態的な側面があり、重要なのは受け手にとってオーセンティックに映るかどうか・現代のインバウンド・ビジネスへと応用<ul style="list-style-type: none">- 観光資源自体の真正性よりも観光客がそれをどのように捉えているかの方が重要になる可能性- 現代のインバウンド・ビジネスにおけるオーセンティシティとは旅行先の環境、製品、サービスと観光客の期待するイメージとが一貫しており、かつ一致していると認識されたときに喚起されるものでは <p>出所: 寺崎(2019)及び本人へのヒアリングをもとに作成</p> <p>5</p>

そこで、大体、アカデミックというのは、オリジナルのものにいろんなものをくっつけたら、再定義したりするのが好きなんですけど、ここに出てきたのが、エマージェント・オーセンティシティ、「創発するオーセンティシティ」というものです。これは、真正性が創発される、という時点ですでに、何の事だという話になっているわけですが、そういう概念が出てきたわけです。「創発するオーセンティシティ」、これは何を言っているかということ、お土産物のような商業的な目的で作られた、元々は非真正的なものが、時間の経過に伴いオーセンティックなものとして認識されていく過程を指します。元々、江戸時代にあったものではないが、江戸的と言われ、やっているうちに、だんだんとそれが伝統になっていくというようなイメージです。従って、オーセンティックとは、静的 (スタティック) ではなく、動的 (ダイナミック) であるということ。ですので、受け手にとってオーセンティックに映るかどうか、というのがコーヘンの意見でした。つまり、現代の、特にインバウンド・ビジネス、海外のお客さんに受けるのは、さきほどの忍者村もそうですが、どのように捉え得るか、というところが、だんだんとオーセンティシティの概念に被ってきているのではないかいのが昨今の動きです。

オーセンティシティが注目される背景

- 世界主要都市の同質化
 - 都市もグローバルなブランドやサービスで溢れ、その軒並みからローカルらしさを見出すことは難しくなっている。
- 逆説的にいえば、ローカルらしさ、つまりオーセンティシティを感じられる場所の価値が相対的に高まってきている。
- 大都市や繁華街にみられる画一性や没場所性が潜在的な観光客を遠ざけている
 - Urry and Larsen, 2011

オーセンティシティの喪失が観光にネガティブに働いている？

出所:寺崎(2019)及び本人へのヒアリングをもとに作成

6

では、オーセンティシティというのは、なぜ大事になってくるのかということ、皆さんも感じるとは思いますが、世界の大体どこでも同質化してきていることが挙げられます。世界も同質化してきているし、日本も、北海道から沖縄まで色々と回って、だんだん似てきているなと感じている方が多いのではないかなと思います。要は、モノにしてもお店にしてもナショナルブランドが溢れ、ローカルらしさを見出すことは難しくなっている。逆に言うと、ローカルらしいという、地場のオーセンティシティを感じられる場所の価値がより相対的に高まってきているのではないか、ということです。因みにこれは、観光戦略のところの一つ言うと、アトラクティブ(魅力的)にしようと思って中央のものを持ってくると、画一的や没個性になってきて、かえって潜在的にお客さんを遠ざけるような、逆説的な動きが起こっている。故に、このオーセンティシティという概念がより重要になってきたというのが、観光における文脈である。

観光分野におけるオーセンティシティ

- 創発するオーセンティシティ(emergent authenticity)
 - 土産物のような商業的な目的で作られた非真正的なものが、時間の経過にともないオーセンティックなものとして認識されていく場合があり、このような過程(Cohen 1988)
 - オーセンティシティには静態的というより動態的な側面があり、重要なのは受け手にとってオーセンティックに映るかどうか
- 現代のインバウンド・ビジネスへと応用
 - 観光資源自体の真正性よりも観光客がそれをどのように捉えているかの方が重要になる可能性
 - 現代のインバウンド・ビジネスにおけるオーセンティシティとは旅行先の環境、製品、サービスと観光客の期待するイメージとが一貫しており、かつ一致していると認識されたときに喚起されるものでは

出所:寺崎(2019)及び本人へのヒアリングをもとに作成

5

ちなみに、今回の講演のかなりの部分は、僕が監修して2019年に出版した『インバウンド・ビジネス戦略』という本の中で、寺崎先生が執筆したオーセンティシティについての章

から取ってきているため、スライド「出所：寺崎」としています。

ありふれた場所のようであり、ローカルの場所ゆえ異文化の人にはオーセンティックに映っているものもあり得る。だから、ここで面白いのは、現地の人々が、オーセンティックであると思っていないものが、外から見ると逆にオーセンティックなものであると見えて、価値が出てくるってことがありうるということ。ローカルなオーセンシティというものは、外から見ると感じて、地場の人々は意外と感じていないってギャップがあるのではないかと。例えば、谷中にあるオーセンシティ、元々、浅草と上野という二大都市の間で生まれた場所だが、だんだん1990年代以降改修され、改修された民家やビルが軒を連ねるようになり、「ご近所感」を味わえる場所として外国人観光客の人気を集めてきた。ここが面白いのは、意図的に作られた観光地ではなく、なんとなくローカル・オーセンシティというものを、外から来た人が感じることによって、なにか取り残された感が良かったみたいなことを言う人いるわけです。もしここに谷中の方いらしたらすみません、これ、全然ディスっているわけではなく、取り残された感を良い意味で使っていますので、全く悪くないのですよ。ローカル・オーセンティックな価値があるように見えてくる。そうすると、現地の人との距離感が近い谷中は、こうした願望を満たす貴重な場所になってきたということで、実はここで面白いのは、寺崎先生いわく、外国人観光客は本当に元々谷中のそうだった状況に触れたことがあるわけではないのだけれども、なんとなく日本の原風景としてメディアを通して知っているイメージがあり、それが集合記憶的に昇華して、「ここに行ったら、なんだ、あの見ていたイメージがここにあるじゃないか」ということで、価値を感じる。面白いですね。そこに来た人は、そのイメージをなんとなく持っていて、これが「○○ぽいよね」とか、「○○ぽさ」というものが外の人々の頭の中に集積して、それを引っかけてくれるような場所があると、これがオーセンティックであると向こうが勝手に感じてくれる。これをオーセンシティと定義づけることもできるのではないかと、と昨今、観光の中で言っている先生がだんだん増えてきました。

谷中事例からの示唆

- 世界遺産に認定されるような芸術的にも歴史的にも真正な場所でもなく、本物感としてのオーセンティシティという切り口から観光地化できる機会があるのでは？
- これといって広く宣伝された場所は見当たらない。
 - 多くの観光地では訪れる人々が事前に目標としている場所があり、それを確かめに行くこと自体が目的となっているのと対照的である (Boorstin, 1962; 近森, 2011)。
- 街を散策することでローカルな本物感が見出されるという、偶発的な要素が街の魅力となっている。

出所: 寺崎 (2019) 及び本人へのヒアリングをもとに作成

8

何が言えるかという、今日、世界遺産からスタートしましたが、世界遺産に認定されるような芸術的にも歴史的にも真正な場所でもなく、本物感としてのオーセンティシティという切り口から、観光地化ができる機会が結構あるだろうということです。多くの観光地というのは、世界遺産とか真正的なものがある場合、それを訪れること、確かめに行くこと自体が目的になっている場合が多いわけですね。それはそれでありなのですが、今言った谷中みたいなローカル・オーセンティシティという、それとは対照的なオーセンティシティというのがあり得るんですね。

観光地として人気の東京ディズニーランドは オーセンティックな場所なのか

- 中村 (2009) はオーセンティシティ「化」した観光地としてディズニーランドを挙げ、現代アメリカ文化が表象化された場所であると述べている。⇒ つまり、現代アメリカ文化という枠組みで捉えた場合、ディズニーランドはオーセンティックな場所といえる。
- ディズニーランドの世界観を形作るのは、主に中世ヨーロッパや中東に関連した物語や文化であり、各アトラクションやキャラクターはこうした文化のコピーに過ぎないようにもみえる。
- しかしながら、ディズニーランドから示唆されるのは、歴史的または芸術的に「本物」であることが必ずしも本物「感」にはリンクしないという事実
- 例えディズニーランドが「オーセンティックなフェイク」(遠藤 2011) に過ぎないとしても、大切なのは時代背景や文化が異なる文物が織りなす「本物」の世界観に一貫性と調和が取れていることなのである。

出所: 寺崎 (2019) 及び本人へのヒアリングをもとに作成

9

どんどん概念が広がって何なのかという話もあるのですが、そういう見方があり得る、という事です。先ほど東京ディズニーランドが出てきましたが、これが毎回色々議論になります。東京ディズニーランドはオーセンティックなのか、という観光の研究者の中でも議論があるのですが、中村先生などは、ディズニーランドはもうオーセンティシティ化した観光地であると言っています。いわゆるほとんどの人が、ディズニーランドは、今のアメリカ文化に対するイメージを凝縮して濃く作って、それを表象化した場所であるととらえている。現

代アメリカ文化という枠組で捉えた場合、実はディズニーランドはオーセンティックな場所である、という事です。こうなると、聞いている方からしたら、オーセンティックって何なのと思うかもしれませんが、今そうやって（オーセンティシティの概念が）拡張してきたという話をしております。

ただ、非常に面白いのは、ディズニーランドの世界観とは、大体中世ヨーロッパや中東などの物語なので、本来はコピーにしか見えないわけです。しかし、ディズニーランドに人気があって、それを皆が「ぼい」と思って楽しんでいるということは、歴史的、芸術的に本物であることが、必ずしも本物感にはリンクしないということです。オーセンティックなフェイクである。いろんな言葉ができますけども、オーセンティック、本物っぽいフェイクに過ぎないとしても、皆が思っている世界観に一貫性と調和、フィットしているといった瞬間に、本物感を感じてもらえる、という事です。

ドバイの例

- アラビックな世界観をビルやリゾートとして近代化した形で表現した場所であり、砂漠であったドバイに「本物」の歴史はない
- 一方で、全体として本物「感」は伝わってくる。
- 直感的に把握される外見は、本物より「本物」らしいことがあり (Urry & Larsen, 2011)、真正であることと、本物であることを分けてオーセンティシティを議論する必要がある。



パームジュメイラ

出所: 書籍(2019)『及び人々のヒアリングをもとに作成』

では、他はどうなのかと言うと、今、世界で地域の単位あたりの観光客が最も多いのは、都市観光客の入れ込みと金額で世界ナンバーワンは、ドバイなのです。砂漠の地、ドバイ。では、ドバイに観光客は何しに来ているのか。砂漠の地に来ているわけですが、実は砂漠だけ見ているわけではないのです。多くの場合は、アーティフィシャル（人工的）な観光地を作って、そこに呼び込んでます。アラビックな世界観をビルやリゾートとして近代化した形で表現した場所を作っています。ドバイ自体には、あるものに「本物」の歴史は別にないわけです。（スライドの）右の画になりますけど、（中東には）ヤシの木のイメージがあるでしょう、ということで、パーム・ツリーの形を模したパーム・ジュメイラという、全て人工的に作った島で、ここに、7つ星ホテルがあるのですが、非常に人気があるわけですね。7つ星（のホテル）って何なのということあるのですが、従って、直感的に把握される外見が、本物より「本物」らしいことが時にある。「本物っぽさ」を強調することによって、真正的な本物より本物っぽく感じられることがあって、それはオーセンティシティなのか。ちなみ

に、この左にある写真はドバイの砂漠ツアーの最後の食事の際に行われるベリーダンスです。これ僕も行ってきたのですが、皆はおお、となり、何となく来た感じがします。ベリーダンスは元々ドバイ（発祥）のものではないにも関わらず、ドバイの砂漠ツアーの最後に、この元々なかったベリーダンスを見ると、極めて本物感を感じて皆の満足度が高くなるというケースです。

おわりに

- ・ もちろん真正の歴史や伝統が備わっていれば、観光には有利だが、より重要なのは、真正な場所それ自体ではなく、そこにどのようなストーリーを乗せ、発信していくか
 - 例えば、外国人観光客に対して、地域の「インスタグラム・コンテスト」を開き、その画像を解析すれば、どのような対象にオーセンティシティを感じているかヒントが得られるだろう。
 - その際、発信されたストーリーと現地での体験に齟齬がないよう、慎重さが求められる。
- ・ 本物感としてのオーセンティシティに機会がある
 - オーセンティシティを真正性ではなく本物感と捉えることで、真正の歴史や伝統がなくともオーセンティックな場所を構築していける可能性が開かれる
 - さらに、観光客へ向けられた世界観に一貫性があり、かつ全体として調和が取れていることが大切

出所：寺崎(2019)及び本人へのヒアリングをもとに作成

11

真正の歴史や伝統が備わっていればもちろん観光には有利なのですが、観光という観点から見ると、真正な場所それ自体ではなく、どんなストーリーを乗せて発信していくかというのが実は重要になってきており、来る人にどのように見えるかということが大事、ということです。ですから、外国人観光客に対して、地域の「インスタグラム・コンテスト」などを開き、その画像を解析すると、どんな場所を対象に外国人がオーセンティシティを感じているかのヒントが得られるかもしれません。ただ、その場合、今度はこちら側が発信するストーリーと現地での体験に齟齬がないようにデザインしなくてはいけなくなります。観光の場合、ちょっと誤解のないように言いますと、真正性は極めて大事ですが、戦略として考えた時は、本物感としてのオーセンティシティかフィーリングの方に機会があるで、本物感が感じ取れることで、仮に真正の歴史や伝統がなくても、オーセンティックな場所を構築していける可能性が開かれてくる。そうやって行かないと、「うちには何にもないんだよね」という地域の人たちが勝負しにくくなってくる。ただその時には、世界観に一貫性があって、全体して調和が取れるようにしなくてはならないとともに、地域もそれを認知、支援する必要があります。

ちょうど30分ですので、一旦、ここまで致します。やや早口で失礼しました。では桑原さんに戻します。

参考文献

- Boorstin, D. J. (1962) *The image*, Atheneum (星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代 マスコミが製造する専美』東京創元社、1964年)。
- Cohen, E (1988) Authenticity and commoditization in tourism, *Annals of Tourism Research*, 15, 371-386.
- Deuter, M., Bradbery, J., Turnbull, J., Hey, L., & Holloway, S. (2015) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 9th Edition*, Oxford University Press.
- Harvey, D. (2009) *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*, Columbia University Press (大塚定晴訳と解説・森田成也・中村好孝・岩崎明子訳『デヴィッド・ハーヴェイ コスモポリタニズム―自由と変革の地理学』作品社、2013年)
- MacCannell, D. (1999) *The Tourist*. University of California Press (安村克己・須藤廣・高橋雄一郎・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟訳『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』学文社、2012年)
- Tellström, R., Gustafsson, I., & Mossberg, L. (2006) Consuming heritage: The use of local food culture in branding. *Place Branding*, 2(2), 130-143.
- Urry, J., & Larsen, L. (2011) *The Tourist Gaze 3.0*. Sage Publications (加太宏邦訳『観光のまなざし [増補改訂版]』法政大学出版局、2014年)
- 遠藤英樹 (2011) 「権営主義」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。
- 小城英子・萩原道・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子 (2010) 「集合的記憶とテレビ：ウェブ・モニター調査 (2009年2月) の報告 (2)」『メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』60, 29-47.
- 田中祥司 (2013) 「真正性の評価過程」『商学研究紀要』77, 91-103.

12

参考文献

- Boorstin, D. J. (1962) *The image*, Atheneum (星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代 マスコミが製造する専美』東京創元社、1964年)。
- Cohen, E (1988) Authenticity and commoditization in tourism, *Annals of Tourism Research*, 15, 371-386.
- Deuter, M., Bradbery, J., Turnbull, J., Hey, L., & Holloway, S. (2015) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 9th Edition*, Oxford University Press.
- Harvey, D. (2009) *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*, Columbia University Press (大塚定晴訳と解説・森田成也・中村好孝・岩崎明子訳『デヴィッド・ハーヴェイ コスモポリタニズム―自由と変革の地理学』作品社、2013年)
- MacCannell, D. (1999) *The Tourist*. University of California Press (安村克己・須藤廣・高橋雄一郎・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟訳『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』学文社、2012年)
- Tellström, R., Gustafsson, I., & Mossberg, L. (2006) Consuming heritage: The use of local food culture in branding. *Place Branding*, 2(2), 130-143.
- Urry, J., & Larsen, L. (2011) *The Tourist Gaze 3.0*. Sage Publications (加太宏邦訳『観光のまなざし [増補改訂版]』法政大学出版局、2014年)
- 遠藤英樹 (2011) 「権営主義」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。
- 小城英子・萩原道・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子 (2010) 「集合的記憶とテレビ：ウェブ・モニター調査 (2009年2月) の報告 (2)」『メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』60, 29-47.
- 田中祥司 (2013) 「真正性の評価過程」『商学研究紀要』77, 91-103.

12

7. パネルディスカッション・質疑応答②

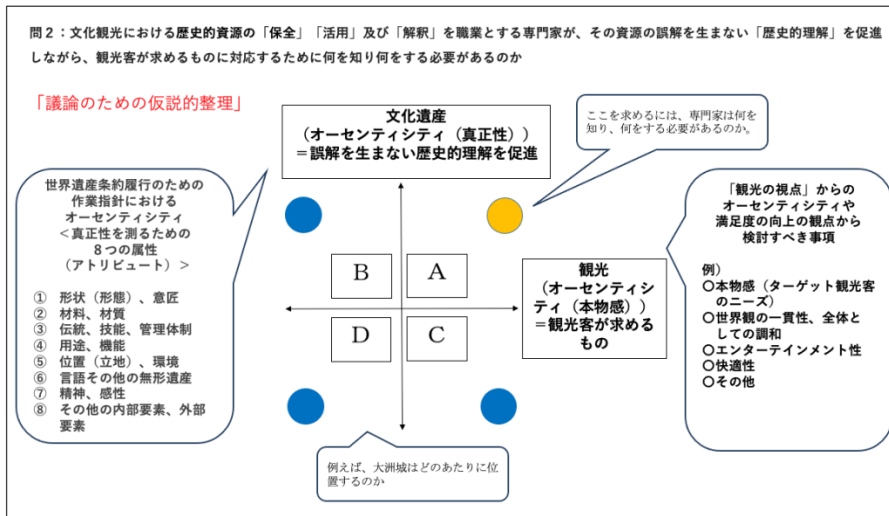
桑原 池上先生、ありがとうございました。それでは、これからパネルディスカッションの方に入らせていただきたいと思います。

問1：歴史的資源（**property**）や場（**place**）のオーセンティシティ（真正性、真実性）の、誤解を生まないような歴史的理解を促進する「保全」「活用」「解釈」とは

問2：文化観光における歴史的資源の「保全」「活用」及び「解釈」を職業とする専門家が、その資源の誤解を生まない「歴史的理解」を促進しながら、観光客が求めるものに対応するために何を知り何をする必要があるのか

今日は、2人の先生からご講演いただきました。まずこのパネルの問いとしまして、2つ設定させていただきました。1つ目が、歴史的資源や場のオーセンティシティの、誤解を生まないような「歴史的理解」を促進するような「保全」、「活用」、「解釈」とはどのようなものなのかということ、2つ目の問いとして、本日の研究会のテーマでもある、文化観光における歴史的資源の「保全」、「活用」、「解釈」を職業とする専門家、つまり、今日ご参加いただいている皆様方が、その資源の誤解を生まない「歴史的理解を」促進しながら観光客が求める「本物感」の提供に対応するためには、何を知り何をする必要があるのかということ、この2つの問いをご用意させていただきました。

これからのパネルディスカッションでは池上先生を始め、今日ご参加いただいている皆様からそれぞれ活発なご意見をいただければと考えております。よろしくお願い致します。



こちらの図について、ちょっと分かりづらい部分があるかもしれませんが、問2の議論の仮説的な内容として、縦軸に「文化遺産」、誤解を生まない歴史的理解を促進する、文化遺産の視点からのオーセンティシティと、横軸に観光客が求めるオーセンティシティの、どのようなバランスを取っていけば良いのかを検討するための材料を示しています。文化遺産のオーセンティシティについては武藤さんの方から説明がありました8つのアトリビュート、観光のオーセンティシティについては、池上先生からもご紹介がありました、「本物感」や、世界観の一貫性、全体としての調和といったようなオーセンティシティ、そして、観光客が満足するような様々な要素を仮説として設定しています。このような仮説をベースに専門家が何を知って何をしていく必要があるのかについて議論ができればと考えております。それでは、これからディスカッションをしていきたいと思いますので、この問1、問2 いずれでも結構ですので、何かご意見のある方がいらっしゃいましたら、挙手していただければと思います。池上先生のご講演に対する質問でも大丈夫です。よろしくお願いいたします。どなたかいらっしゃいますでしょうか。

池上 桑原さん、この図で言うと、今日の大洲城はこの右下の方で、文化遺産の軸での真正性で言うと、やや下の方という事でしょうか。このマトリックスは、縦軸が文化遺産の真正性を表していて、上が高く、下が低い。横軸の方が、本物感など「観光としてのオーセンティシティ」を測るもので、右が強くて左が弱い、という事ですね？そういう軸で見た場合、大洲城は、先ほどの話からすると文化遺産のオーセンティシティの軸の全てに○がつくわけじゃないので、縦軸では下の方ですが、100万円でお城の体験ができるという意味では、極めて本物感を感じてもらえて付加価値が高いから、観光のオーセンティシティはあるのではないかと。それで、マトリックスの右下に位置しているというような整理をされたわけですね。

桑原 そうですね、はい。仮に、設定させて頂いています。

池上 はい。ということで、議論のための叩き台として、このような話をしてみました、皆さんいかがでしょうか。

山田 私は谷中で景観ガイドライン作成の手伝いさせていただいたので、地元の人たちがどういうふうに「谷中らしさ」を感じているか、そういったアンケートを取らせていただきました。けれども、外部から見る「谷中らしさ」みたいなものは、逆に中に住んでいる人からは倦厭されるものというか「こんなものは谷中ではない」というふうに、オーセンティックを考えるものというのが、人によって随分違うと感じました。人によって、感じ方に大きくギャップもあります。

そして、今まとめてくださっていますが、文化遺産の初めの議論はどうしても客体としての物質的な部分をオーセンシティと考えているところがあって、観光の方はどっちかという主観的というか「私がどう感じるか、思うか」というところでオーセンシティの議論として発展してきているように思っています。こ（の対比）が今日のテーマになっていると思っています。

オーセンシティを「本物感」と言われてしまうと、文化遺産とか、特に建築保存に関わっている人がもう倦厭するような、脂汗が出ちゃうような言い方だと思うんです。「本物感」を出してとか、「本物にする」みたいな話をされると、当初の本物にこそオーセンシティがあるはずだったのにと、言葉の意味として随分ズレていると思っています。ただ、僕が初めに趣旨説明で話したように、「現地の人が本物と思うのだったら良いじゃないか」、「文化財の保存に関しても現地の人たちが本物感を感じているなら、それはもうオーセンシティがあるとして考えても良いのではないか」というようなことを、モニュメントの概念からヘリテージの概念に広がっていく中で、オーセンシティの意味も随分と広がってきているところがあります。この2つは違うけれども、それでも、観光が楽しまれているということを専門家はまず知った上で、（オーセンシティを）考えるのが良いのかなと思っています。コメントになっているのか、質問になっているか分からないですけど。

池上 今の話で、実は僕もちよっと課題に思っていたことを、山田さんのおっしゃった事で感じたのは、だから本当はオーセンシティという言葉ではない、別の言葉に

してあげた方が良いのではないか、という事です。やはり複数の意味を持っている言葉は難しいので、それこそ、創発的オーセンティシティ、といったように頭に何かをつけるなど、違う言葉にするようにしていかないと整理もつかないし、聞いてごわつく、汗をかく感覚というのがあるように思います。同じものだと言われると（汗を）かくのですが、別の概念なのですよ、と言うと、まだ多少汗が薄く議論できるのかもしれないなど。では、どのような言葉がいいのかというのは少し議論しなくてはいけないのですが、概念の整理は多分必要なのかもしれません。

山田 そうですね、こういうふうに違うオーセンティシティの概念が、同じセッションでというか、同じウェビナーに出てきたのは、とても嬉しいなと僕は思っています。

池上 その時にもしかすると、例えば、こういう形で整理をしていくものを積み重ねることによって、概念整理ができる。それぞれに何を求めているのか、整理ってただ整理だけでは意味がないので、整理した上でどう使っていくのかという話になっていくと良いと思います。これが、プロトタイプ A の整理なのだと思うのですよね。

桑原 ありがとうございます。その他、フロアの皆様、池上先生へのご質問もしくは、池上先生に対するご意見等ありましたら、是非ご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。

桑原 ピンポイントで名指しをして恐縮ですが、梶川さん、今日のご講演を踏まえて、何かご意見ですとかありますでしょうか。

梶川 私、さっきの六本木ヒルズが文化遺産になるかどうかというご質問は、すごく実は面白かったなと思っています。もしかしてやはり文化遺産って、その時代に戦力と財力があつた人の思いが残ったものなんじゃないだろうかという認識を、今日非常に強く持ちました。中東にルーブルの新しいものがありますけども、もしかすると、あと何十年か経ったら、パリのルーブルよりこちらが本物だと言われる時代が来るのではないかなと。やはり維持していくために財力というか資金は絶対に必要で、それが時間をかけて維持できたところが、実は本物と言える時代が来るのではないか、というのを、今日お話を伺っていてイメージをしたところです。少し話が飛んでしまうかもしれませんが、私今年に入って、ずっと歌舞伎町で仕事しているのですが、日本人から見ると忌み嫌うホストクラブが、海外から来た女性客

からすると素晴らしいエンターテイメントになる場合があるのです。アメリカやオーストラリアから来た女性の方からすると、アメリカにもオーストラリアにも可愛い20代のボーイズなんていない、と言うんです。その子たちに囲まれてシャンパンを開けて、すごく良い気分になれて、一晩で100万だったらリーズナブルだと言ったお客様が何人かおられました。もしかしてこれも新たな文化なんて実は少し思いました。ですので、何か、オーセンティシティっという言い方をすると、とても大昔に作られた、人が手を触れてはいけないような、石や木でできたというイメージがあるのですが、やはり文化とは、本当に時の流れでどんどん変わっていくのだという事を、今日のセッションで実は非常に感じましたし、川越も新たな視点で訪ねてみたいなど、今日大変強く思ったところです。

池上 なるほど。

梶川 実はもう1点あって、よく楽茶碗というお茶の世界であるのですけれども、初代の長次郎が作ったとされるものはものすごい名品と言われるものなのですが、意外とその後の、例えば13代とか15代などの方たちが、長次郎が作った名品を取材して新たなものを結構作っています。しかも、同じ面をつけているのです。そういったものをお茶会で見ると、アップデートしていく力というのが、やはりある種の、もしかしたら文化の上書きなのかもしれませんが、やはり原型の記録を残しながら、変わっていくものなのではないのか、というのも、今日感じたところです。

桑原 ありがとうございます。

池上 なるほど。まさにエマージングですね。たしかにホストクラブは、今問題になっていますが、財力がなくて無理をして色々少し犯罪的なものにつがるものは良くないですが、財力が十分にあって、それがハッピーな人にとっては極めて新しいエンターテイメントであるということですね。

梶川 そうなんです。思わず連れていかれそうだったのですが、素晴らしいショーもしてくれて、とにかく非常にたくさんの写真を見せていただいたのですが、もうこんなお人形みたいに美しいボーイズが世の中にいると思わなかったと。やはり来られている方って、1泊15万ぐらいの部屋に2週間とか滞在しておられます。その間に東京を遊び尽くしており、実は東京滞在中で一番楽しかったのがホストクラブだ

って言われてしまいました。なんとなく、皆少し日本人は大人しくてシャイな感じですが、歌舞伎町のホストクラブでは真逆のイメージを持って、次も来たら倍ぐらい使いたいっておっしゃっていました。これはこれで、やはりアニメに続く日本の文化だとおっしゃった方が複数名おられまして、非常に衝撃を受けている今日この頃です。

池上 なるほど。

梶川 従いまして、何かこれが日本らしいとか、提供する側があまり思い込まない方がいいのではないかという印象も、実は少し持っております。和文化というと、桃山とか江戸時代に作られたもので、我々が本物だと思うものが日本らしいと思いがちなのですが、本当に皆さん忍者が好きだったり、アニメでやはり描かれた世界をトレースしたいから日本に来る方もいらっしゃいます。日本の古い、古いと言っても昭和の部屋がアニメに出ていて、それが彼らからすると、日本のオーセンティシティだとおっしゃる方も結構おられます。日本らしい、と一口に言っても、実は今、非常に幅があると少し感じております。まさにこのオーセンティシティというのをどう捉えるのかが、今面白い時期なのではないか、と感じています。

桑原 今観光に携わっている方からご意見をいただいたところですが、今日下間先生にご参加いただいているので、下間先生からもご意見をお伺いできればと思っております。いかがでしょうか。

下間 うまく考えがまとまるかわかりませんが、文化財分野で議論してきたオーセンティシティの考え方と、観光分野で議論されているオーセンティシティの考え方は、かなり違うように感じました。宗田先生のプレゼンテーションとも関係するのですが、オーセンティシティはその時代の権威が大衆の信頼を得るために設けた基準という性格を帯びているのだと私自身は理解をしています。その権威は時代によって移り変わるわけです。現代の世界遺産について言えば、世界遺産委員会が権威として、世界遺産の信頼を守るために、オーセンティシティの視点を設けているのだと考えているところです。文化遺産が多様性を帯びる中で、秩序を守るためにオーセンティシティという考え方を発展させざるを得ない現状があるのではないのでしょうか。

この延長で観光分野のオーセンティシティについて拝聴したので、誰が何のためにこの言葉を必要としているのか、よくわかりませんでした。観光客の意識調査をし、求めていることを探る行為にオーセンティシティという言葉当てているようにも聞こえた次第です。

今日の議論を踏まえて、お互いのオーセンティシティに対する考え方の違いを先ず認識することが、ここから先の協働に繋がってくように思いました。

池上 ものすごく大事なポイントで、先ほど、宗田先生にもお伺いしたところで、何のためのオーセンティシティなのか、という、まさに今最後に言っていたところは非常に大事だと思っており、（両者は）やはり違う。逆に言うと、では文化遺産ではオーセンティシティというものを求めるのは何のためなのかというのが知りたいところでもあります。なぜ文化遺産においてオーセンティシティが必要なのか、保護が必要なのかというところを詰めていった時に、基本的にはヨーロッパ人は自分たちの都合でしかものを考えないので、逆に言うと、我々が日本人として、文化遺産におけるオーセンティシティはなぜ必要なのかということを、多分考えていく必要があると思います。我々がなぜ必要だと思うのかについては、実はそこは僕もわからない。観光分野における目的は、実はやはりそれ（オーセンティシティ）によって来て頂き、持続的に観光収入が得られることなのだと思うのです。観光で言うと、ですよ。しかし、文化財の方は、なぜオーセンティシティが必要なのか、恐らくその議論がすごく大事だと思います。

下間 これは、私がお答えした方がよろしいんですか。

池上 宗田先生がいらっしゃらないので、是非教えてください。

下間 文化財分野の中で意見が統一されているのか定かではないので、個人的な見解として述べます。現在、文化遺産全般で行われているオーセンティシティの議論は、各国の文化遺産が世界遺産の基準に合うかを確認するためのものです。世界遺産条約の加盟国が増え、様々な国・地域の文化遺産をバランスよく含むことが世界遺産リストの信頼性を保つ要件の一つとされる中で、オーセンティシティの解釈は広がってきました。武藤さんが紹介して下さったことと関係しますが、どの切り口から価値と保護措置の一貫性を説明していくことが、それぞれの遺産の本物性、真実性に理解を得やすいかという考えが、現在のオーセンティシティの議論の根

底にはあるのだと思います。オーセンティシティという考えが、文化遺産の考えをいたずらに複雑にしている現状を踏まえると、世界遺産のオーセンティシティの議論を、一般の文化遺産にまで当てはめていくことの意味とその必要性を先ず考えなければならないだろうと思っています。世界遺産に適用されている価値解釈以外にも、文化遺産は幅広い考え方を持っていて、そこをきちんと許容しないと遺産の持続性が保てないからです。

先ほど、川越の事例が出てきました。川越の中でも文化財建造物に対する考え方は時間と共に広がってきたように思います。最初は豪壮な店蔵だけが注目され、真壁造りの伝統木造建築を取り壊して店蔵風のものを新築する状況も見られました。今は、店蔵以外のものにも目が向けられるようになり、近現代の建物の保存修理も増えてきました。一番街の目抜き通りだけではなく、門前をなす小路にも目が向けられるようになり、大正の町並み、昭和の町並みと、町並み整備地区も駅に向かって伸びています。以前よりも歴史的建造物を見る目が多彩になってきているのではないのでしょうか。店蔵風に新築した建物にも、町並みの保存の歴史を示し、景観に対する協力の姿勢が現れているものもあります。将来は、川越の歴史まちづくりを紐解いていく資料になるのかもしれませんが。そこに、オーセンティシティという言葉当てはめて個々の建築を評価すること自体が妥当なのかどうかを、改めて考えていく必要があるように考えているところです。

池上 ありがとうございます。そうすると、一つ前の大前提で言った、ではなぜ世界遺産をサステイン（維持）しなくてはいけないのかというところが、恐らく次にテーマになってきて、そこは割と共通解があるのですね。世界遺産を維持しなくてはいけない理由というのは、割と皆さん共通意識なのではないでしょうか。

桑原 山田さん、お願いします。

山田 世界遺産の文面においては、世界遺産に登録する時に、何を持ってそれが本物であるのか、何を持って価値を担保するのかというところで、今日の（武藤さんの）スライドで姫路城の場合を説明したと思います。姫路城では、モノとしては16世紀から一緒のものだ、位置も一緒だと、そういった基準を設けて、だからそれが本物だ、価値がある状態が保たれているんだと説明するわけです。それを失ってしまったら、あくまで世界遺産という枠組みでは本物ではなくなる。世界遺産でなくなったからといって、価値がなくなるわけではないですけども、世界遺産という枠組み

ではそれを条件としているので、それが失われると世界遺産でなくなるというだけかなと思います。

池上 いや、僕が今質問したかったのは、なぜ世界遺産というものが大事なのかということです。そもそも、世界遺産というものの条件があり、では、なぜ世界遺産は重要なのかという、その前提があり、さきほど宗田先生がおっしゃられたのが一つの答えかと思っております。人が何かクリティカルにものを考えなくてはならない時に、スタートとなる軸が必要であると。その基軸があまりに多様すぎると、少し困るので、例えば世界遺産というのは、何かものを評価する時の一つの基軸を提供してくれる、それも世界に通用するスタートラインにはなるので、世界遺産というものを一定の基準で特定し保護するということが重要なのである、と先ほどの話を理解しました。要するに、世界遺産が重要である理由が、そもそも共有されているのかっていうことなんですよ。

山田 ユネスコの世界遺産条約を読んでもいいですけども、文化遺産が人類のアイデンティティを考える上で、確かな基軸になる、一つの礎になるものとして位置付けていると思います。

池上 そのアイデンティティのベースだっというところが、世界遺産の価値である、ということですね。

下間 理念的にアイデンティティ等を捉えていくことも大事ですが、そもそも世界遺産のような枠組みが必要なのは、失われないようにするためという根本的な必要性があるからと考えています。条約制定の背景となるユネスコのヌビア遺跡救済キャンペーンのように、皆で知恵と技術とお金を出し合って、何とか頑張って守ろうという精神を表したのが世界遺産の制度です。それ以前の歴史を捉えれば、第2次世界大戦で傷ついた文化遺産の保護も含まれます。観光分野の方々と大きく異なるところがあるとすれば、文化財分野の人間は、破壊や滅失から守るという使命感を常に背負っているということかもしれません。企業をはじめとする様々な事業者にも文化遺産は大事なものだということを理解してもらうために、学術的・客観的説明を準備することはとても重要です。アイデンティティの大切さはその通りですが、「みんなの遺産」として勝手に壊してはいけないということを伝える客観的根拠も同じように重要だと考えています。

池上 非常に腑に落ちました。壊されないために、というのは今、単純とおっしゃいましたが、重要な、本質的と言いますか、恐らく非常に腑に落ちるキーワードである気が致します。ありがとうございます。

桑原 最後に、今日のテーマとしまして、『文化観光におけるオーセンティシティとインタープリテーション』と題していますが、文化遺産の視点からのオーセンティシティという観点からは、憲章の方でもご紹介させていただきました通り、解釈、インタープリテーションが、場所の真正性を損なうものではあってはならないということで、その真正性が何なのかという話もちろんありますが、どのように場所の価値を伝えていくのかというインタープリテーションをどのようにしていくのかも一つ大きなポイントとされているところです。最後に、山内さんもしくは武藤さん、このインタープリテーションについて何かコメントがありましたら、是非ご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

武藤 活発なご議論、どうもありがとうございます。武藤です。こちらの会場には文化遺産保護に携わる者が多かったので、先ほどの池上先生の、そもそもなぜ世界遺産が重要で、なぜ文化遺産が保護されなければいけないのかというところで、それを私たちは自明のものとして捉えていた中で、やはりそれが、観光側の方たちに伝わっていないという事実でありますとか、例えば、文化遺産にとって悪い観光の仕方が文化遺産を壊すことになったり、ある意味脅威にもつながったりするということですが、もしかしたら観光側に伝わっていないのではないかというようなディスカッションをこちらの方でも行っておりました。今回、こうした文化遺産を保護する側と観光に携わる皆様方と、同じ時間とテーマを共有させていただいて、我々にとっても、とても有意義な時間になったと思います。そこでやはり、文化遺産という物質的な、物理的な、例えば建物や遺跡を解釈する上で、それは多分私たち文化遺産側から、観光をなさる方にもそうですし、一般の方にもそうですし、解釈というものを共有しながら、どこで妥協すべきなのか、そういった話し合いをしながら、時代と共に議論していかなければいけないということ、改めて痛感致したところです。以上です。

桑原 ありがとうございます。すみません、ちょっとお時間が超過してしまっておりますが、最後に、一言閉会の挨拶ということで、池上先生からご挨拶 いただきまして、締めさせていただきます。池上先生、よろしくお願い致します。

8. 閉会挨拶

池上 はい、ありがとうございます。本当に今日はこういう機会をいただきまして、ICOMOS の皆さん、どうもありがとうございました。大変感謝しております。コーネルとセントラルフロリダ大学という、観光系でアメリカで 2 トップの観光系の大学に話を聞いて出てきたのは、やはり今一番キーワードになっているもの一つ、サステナビリティです。そのサステナビリティというのは、やはり観光がローカルであったり、自然であり、もしくは文化遺産を壊してはいけなくて、やはりオーバーツーリズムの問題も含めて、今日お話されていた ICOMOS の皆さんが大事にされているものを、観光の側がいかにか維持する、もしくはより良い形に持っていけるようにするかっていうことを考えなくてはいけないというのが極めて大事な概念になっていると感じました。今日のお話は、もう一つ言うと、やはり観光側のサプライヤーロジックでのサステナビリティと、文化遺産側の方の思う大事なサステナビリティがあり、被る部分も多いと思うのですが、もしギャップがあるのであれば、それが何であるかをより良く理解して、どうやったら文化遺産のサステナビリティが実現できるのか。今日の話を通じて、概念が違ったんだけど、目的は実はかなり被っているのではないかという気もしましたので、本当にサステナビリティはキーワードであると思います。ただ、日本で観光に関して、サステナビリティをどのように実行するかという方法論は、まだ極めてプリミティブだと思います。そういう意味では、先ほどの話や、相互理解をして発展させる非常に良いスタートだったので、また機会があればお話しさせていただけると嬉しく思います。本当に皆さん、桑原さん、武藤さん、アレンジしていただいて、ありがとうございます。また色々教えてください。

桑原 ありがとうございました。それでは、時間を少し超過してしまいましたが、今回の研究会はこれにてクローズさせていただければと思います。ご登壇者の皆様、そしてご参加者の皆様、本当にありがとうございました。この後、アンケートフォームも送らせていただきますので、是非ご協力いただければと思います。それでは、皆様、本当にありがとうございました。

参加者からの終了後アンケート寄せられたコメント（抜粋）

- 宗田先生のお話がとっても面白かったです。確かに両刀の剣、いつでもどこでもこれになってしまいますがバランスが重要なんですね。文化遺産は常に政治に利用され続けて来たし、今エドワード-サイードのオリエンタリズムを改めて見直し、文化や歴史が将来いつどこで火を吹くのかという事も心のどこかに据えて私達はこのフィールドにいるべきなんだろうなあ、と思っています。皆様ご準備からお疲れ様でした。ありがとうございます。
- 日本国内だけでなく海外の事例なども取り上げてお話してくださり、とても興味深い内容でした。キャッスルステイ？など知らなかった取り組みなども知ることができて面白かったです。用事があり途中退出してしまい、最後まで参加できなかったのが残念です。本当にありがとうございました。
- 大変有意義な内容でした。多くの示唆を得ました。
- 御講義をいただいたお二人の先生に御礼を申し上げます。EP研究会の皆様にもありがとうございます。文化財と観光のそれぞれの分野におけるオーセンティシティの考え方や課題が窺え、とても勉強になりました。
途中のコメントに「残り続ける財力があるものが文化財になるのでは」という御感想がありました。そのような一面も確かにありますが、それだけであれば、お城、武家や貴族の屋敷、民家、産業遺産等の多くが現在には残されなかったようにも思われます。時代が変わり、かつての経済力を失ったものに対し、多くの方々の献金や努力によって今に残ってきたものが多数あります。今後もこうした協力を必要とするものが数多くあることに目を向けると、文化財と観光の接点広がっていくように感じられました。
「時の権威」の思想と関連する「オーセンティシティ」という考えの中に、「お客様」が入ってくる現代らしさを感じましたが、そのどちらにも翻弄される「地元」があることにも目を向けていきたいと思います。
- オーセンティシティの多義性や、文化財側と観光側のオーセンティシティに対する捉え方の明確な違いが明らかになりました。一方、観光側にも様々な立場（まちづくりに近い側や、観光事業に近い側など様々）がいますので、今後より精緻な議論ができるとよいと思いました。
- 観光と文化、それぞれの領域からのオーセンティシティの定義や枠組みの捉え方の差異に自覚できる有意義な研究会でした。ありがとうございました。
- 熊本県南部の人吉市で、観光協会の仕事をしています。大変刺激的で勉強になりました。ありがとうございます。
多くの地域がそうだと思いますが、文化財的には真正性を持つ資産が少ない中で、観光的に真正性を感じてもらおうようにする動き（第3象限から第4象限への動き）をどう作っていくかで頭を痛めています。そのためのブランディング戦略にも取り組んでいますが、作ったブランドが地域の資産とマッチしていない、いかにも無理に作ったブランドで、一言で言えば「ピンとこない」ものになってしまっています。何かアドバイスはいただけますでしょうか？
講師の方々のプレゼンテーション資料と議事録をいただければと存じます。
- 観光から見たオーセンティシティ、文化遺産から見たオーセンティシティ、それぞれに定義や考え方、目指すものが違うということが今回の研究会で明確になりましたし、だからなおさらその違いを意識しながら学際的に議論していくことの重要性を改めて認識しました。文化遺産に対する受け手の感じるオーセンティシティと文化遺産自体が持つオーセンティシティ、その2つをつなぐのはやはりインタープリテーションの在り方にかかってくるんだろうなと感じました。それゆえ、文化遺産のインタープリテーションとして、遺産の歴史的真相を正しく誤解のないように伝えること、また伝え方が重要になると思いますし、遺産の整備の在り方についても同時に考えていく必要があるのではと思いました。
- 勉強になりました。ありがとうございます。
- 観光業に就いている者として、文化資源における真正性 **authenticity** と観光におけるそれは実際異なっていること、そして観光客を呼ぶために必要である真正性はどこまでなのか、等考えさせられることが多く、非常に勉強となりました。
ただ、観光においても真正さを求める「traveler」と本物感を求める「tourist」で異なる、

とのことで、今後インバウンドの増加に向けて戦略を立てていく際に留意すべきこととして理解いたしました。ありがとうございました。

- とても充実した内容かつテーマ設定で、参加者の中で色々な考えの違いを明らかにする仕掛けが素晴らしかった。
- お二人の先生のご講演、大変興味深く拝聴しました。特に宗田先生のお話は非常に刺激的でした。一方で、ご講演とは対照的に、ディスカッションのパートにおける観光側の議論がマーケティングにやや寄りすぎている印象を受けると同時に、観光人類学／社会学で蓄積のあるオーセンティシティに関する理論的展開の整理が十分には為されていないように感じました。観光におけるオーセンティシティを、来訪者の意識調査や人を呼ぶための指標としてしまうことは、議論の幅を狭めているのではないのでしょうか（文化遺産＝保護／観光＝開発という二項対立を想定されているような印象も受けてしまいました）。今回の議論のテーマは、所与の存在とされた文化遺産におけるオーセンティシティと、経験的に観光者が獲得するオーセンティシティとを理論的に整理し、その結果としてどのように矛盾／調和して文化遺産観光というものを達成していくのか、という方向に向かっていくべきだったように感じます（もちろんそれぞれにおけるオーセンティシティの考え方も前近代→近代／近代→ポスト近代のように揺れ動いていますが）。その点では、ディスカッションの最後に少しだけ触れられていたインタープリテーションに関する議論は、重要な論点になり得るかと思いました（例えば、誰のための何に関するインタープリテーションなのか）。全体的に学びの多い研究会でしたので、次回以降も楽しみにしております。
- インタープリテーションという視点の重要性について考える貴重な機会になりました。御講演や企画運営等を実施してくださった皆様に御礼申し上げます。

オーセンティシティに関する連続研究会 記録集
第3回「文化観光におけるオーセンティシティとインタープリテーション」

発行：日本イコモス国内委員会EP(若手専門家)委員会

編集責任者：山田大樹（EP主査）、桑原佐知子（EP委員）、武藤美穂子（EP委員）

動画編集：八並廉（EP委員）

編集協力：古賀大智（EP学生メンバー）

*本会議録はサントリー文化財団の研究助成を受けて作成されました。

*文責は編集責任者にあります。お問合せ、修正が必要な際には、山田
(yamada.urbandesign (アットマーク) gmail.com) までご連絡ください。

2024年6月公開